ど、お情けをうけた者は一人もおへなんだ。」
「さうか、お前は久坂の唄を唄つて、泣いてゐると聞いたし、いまも久坂の話に涙を流すところをみると、てつきり世話をうけた者だと思つたが、わしの感違ひであつたかな。」
「お情けをうけた身どしたら、意地にもこゝで涙は見せられまへん。敵方の近藤はんまで、久坂はんのお偉いのを御存じやつたかと思うて、つい出た涙どす。……お味方同士やつたら、どないよろしおしたやろ。お味方やつたら、もつともつと、久坂はんの御立派なことがお解りどしたやろに。……」
「お前は、眞木も宮部も知つてをるだらう。」
「存じてます。」
「それになぜ久坂だけが、そんなに偉かつたのだ。」
それは近藤の自分自身に對する疑問であつた。
「眞木先生も宮部の旦那はんも、御立派なお方どした。お眼にかゝつてますと、眞木先生は、お師匠はんみたいに、ひとりでに頭の下るお人どしたし、宮部の旦那はんは、いかにも大將らしいお人どした。そやけど、久坂はんは普通の粋なお方で、氣樂に藝妓達とお遊びやして、一緒にほたへたり、お作りやした端唄や都々逸を唄はしたりおしやして、あつさりした、氣のおけんお人どした。何でもいへるし、何でも聞いとくれやした。遊んでる時は友達みたいにおすのやけど、後になつてみると、何やかう底の知れん、床しいお人みたいな氣がして、遊びながら、誰よりもいつち深い事を考へといやす、お人やつたといふ氣がしました。眞木先生や宮部の旦那はんでも、一目おいといやしたし、長年御贔屓になつてました間には、いろいろなことがおして、久坂はんのお肚の底には、いつでも御立派なお覺悟があるのやなと、ふだんあんまり氣さくにしといやすもんどすさかい、びつくりするやうなことが何ぼもありました。」
「眞木や宮部のことを思ひ出しても、涙は出ないか。」
「お氣の毒なと、當座は泣きました。そやけどもう返らんお人やと、諦めがつきます。それに久坂はんだけは、いまだにお死にやしたとは、どうしても思へまへん。――そのお死にやしたと思へんお人が、やつぱり死んどいやすのやと思ふと、泣くまいと思ても、泣けて來ますのどすわ。……ほんまに、良えお人どしたのに。……」
「では、京には久坂の世話をうけた女は、一人も居なかつたのか。」
「いゝえ、それがたつた一人るやはります。何ちう冥加な女子はんどすやろ。……久坂はんから、

今日あつて明日ない命、互ひに憂き目を見るような仲になるまい、死んだ後に、綺麗な思出だけを殘さうといはれて、同じやうに諦めた藝妓達で、久坂はんにだけは、手出しをして、朋輩を出し抜くやうな眞似はせんことにと、固くいひ合はして、久坂はんを守つてたんどすのに、その久坂はんに、女子はんが出來たと聞いた時には、みんなで久坂はんを、隨分いぢめました。久坂はんはお困りやして、平謝りにお謝りやしたんどすえ。理窟もなにもない、玄瑞一生に一度の不覺だつた、お前達に殺すといはれても、諦められん程好きになつたんだ、堪忍してくれとおいひやすのどす。これには何ともせうがおへんので、みんな諦めて、その女子はんだけは、目こぼしにしたげますちうて、大笑ひになりました。やけるより羨しおした。その女子はん、どない悲しんどいやすやろと思ふと、人事やおへんわ。」

「それはどこの女だ、やはり藝者か。」

「藝妓はんどす。おたつといふ名で、島原の角屋でお知合におなりやしたんやさうにおす。」

「角屋。――」

近藤は何か一撃受けた感じだつた。

「そのたつといふのは、今でも出て居らうか。」

「どうどすやろ。一時久坂はんがお退かしやして、圍うといやしたさうにおすけど。……」

「さうか。いろ〳〵とよく話してくれた。禮をいふぞ。」

君尾は依然として近藤を解しかねてゐた。しかし深い謀略や、隊の必要からの探索とは思へなかつた。たゞかうした近藤が、噂と想像の中に描いてゐた、兇惡無類の佐幕武士でないことだけは理解された。

「君尾、わしは今夜の禮がしたい。勝手にこちらできめても、お前としては受取れぬものもあらう。遠慮なくいつてくれ。何を遣はさう。」

「何にも要れしまへん。」

「それではわしの心が濟まんのだ。何ぞ――何でもよい、受けてくれぬか。」

「お心ざしは嬉しおすけど……」

君尾は親しみを見せて微笑んだ。

「近藤はん、あては今夜、あんたはんが情け知らずの、非道なお人やないことを知りました。あてはそれでよろしおすけど、世間や朋輩には通じしまへん。その近藤はんのお座敷へ出て、お喋りにお禮をもろたといはれては、明日からお座敷はおろか、朋輩にも顔向けができしまへん。お心持は

嬉しうお貰ひ申しときますさかい、お悪うお思ひにならんと。……」

「さうか。解つた。武士にもお前程の節を持つ者は疎い。意地や節に強い程、人は不自由をするものだ。殊に女の身ではな。わしはお前に惚れた。お前程の女を情婦にしなかつた久坂の心持が、わしには解らぬ。これが敵味方でなかつたら、一も二もなく、わしはお前の、末始終の面倒を見てやりたいくらゐだ。」

近藤の言葉に偽りはなかつた。互ひの立場と敵愾心を忘れてみれば、今は男と女だつた。男らしい男にほだされる、女の心を君尾もまた持つてゐた。しかもしみじみと近藤の顔を仰いで、君尾の口にするのは、叶はぬと知つての上の希ひであつた。

「お言葉は身に沁んで嬉しおす。あんたはんが、天朝様のお味方にさへなつとくれやしたら、こんな不束者でも、喜んでお世話にならして貰ひます。……」

近藤は穏かに笑つた。

「君尾、その一言が千金だ。しかし近藤勇が女のために、宗旨を變へるわけには行くまい。お前もその意地を立て通せよ。」

君尾は思はずほろりとした。

「では別れる。今後もわしの座敷へだけは、顔を見せてくれ。」

「もうお歸りどすか。」

「お前は幾松と仲がよいさうだな。長州の武士が幾松の箱屋に化けて、三本木に潜んでをる者があるといふ報らせが、隊に這入つてをる。」

君尾はぎよつとして、顔色が變つた。

「實否は知らぬが、わしに聞いたといはずに、幾松に傳へてやるがよい。……君尾、これが今夜の禮だ。」

君尾は、出て行く近藤の、男らしい幅のある肩を見送つた。感謝が言葉にならずに、沈默の固唾になつて、息の詰つた胸の動悸が高かつた。……

四

夜の四つ過ぎといふのに、雨の中を駕籠屋は提燈を提げて、紅殻格子の前に停つた。寺と住宅がまばらに野を埋めてゐる千本七條のほとりの、とあるしもた家の前であつた。

「ご免やす。――今晩は。――ちよつとお訪ねしますがな。竹内おたつあんいははるのは、こちらはんどすやろか。」

裡から不明瞭な老婆らしい聲が、それに答へた。

「島原の駕籠平どすがな。角屋はんから、お客さんを御案内して來ましたどす。」といつた駕籠屋の若い者は、やがて駕籠の傍へ戻つて來た。

「旦那はん、お待つとうはんどした。こゝやさうにおす。」

若い者の一人が客の傘を展げ、一人が足駄を揃へると、近藤は駕籠から出た。

「御苦勞であつたな。先に歸つてもよい。角屋へ寄つて、後刻立寄るといつておいてくれ。」

近藤は樽子先へ寄つて傘をすぼめた。間もなく一人の老婆が、手燭を片手に猿戸を開けて小腰を屈めた。

「お越しやす。誰方はんどすやろ。」

「わしはおたつ殿には面識のない者だが、久坂さんのことでお目にかゝりたく、夜中をおしてお訪ねしました。」

「まアまア、旦那はんのお知合のお方どすか。姐はんも嬉ばはりますやろ。どうぞお這入りやして。……」

早合點をした老婆に案内されて、近藤は茶の間へ通つた。神棚、長火鉢、三味線、友禪模様の座蒲團、すべてが藝者の屋形の雰圍氣であつた。

「奥はお寢床を敷いて、散らけてますさかい、失禮におすけど、ちよつとの間こゝで御辛抱おしやしとくれやす。」

長火鉢の鐵瓶の湯を取つて、茶を淹れた老婆が去ると、入れ違ひにおたつが現れた。二十か二十一の、いかにも活々とした邪氣のない人形風な京女で、美しいといふよりも、可愛い感じに溢れてゐた。近藤の期待した久坂の愛人といふ程の特長は、どこにも見出されなかつた。期待外れの輕い失望は、それだけに哀感を唆るものがあつて、淑かに手を仕へた丸髷姿が痛ましかつた。

「お休みでしたかな。遲く伺つて失禮しました。」

近藤の言葉には、無雜作な親しみが籠つてゐた。

「誰方はんどしたやろ。ついお見それしてまして。……」

「わしを御存じではないかな。」

「失禮におすけど。……」

知らぬ、顔を合せたことがなかつたと見える。――先づよかつたと近藤は吻とした。

「いや、御存じないのが當然だ。わしも生前の久坂さんには面識がない。しかし久坂さんには、是非お目にかゝりたいと希つてをりました。それが希ひを果さぬうちに、去年の騒動で討死なされたと聞き、地だんだ踏んで殘念がつたが、もはや追附かぬ。長州へ行けば、久坂さんのこともいろいろと聞けるであらうと思ふが、忙しい體ではそれも叶はず、長州も絶えず國が騒動をしてをる樣子で、果して無事に入國が出來るかどうか、それも判らぬ。ところで今夜思はぬ所で、ふとあんたの話を聞いたり、何ぞ殘されてゐるものでもあれば、見せて貰ひたいと思つて、夜中失禮だとは存じたが、かうしてお訪ねしたような次第です。」

「それでこの雨の中を、訪ねとくれやしたんどすか。」

感謝と嬉しさと、新らたに迫る追懐に、おたつはもう黒目がちの明るい眼に涙を泛べてゐた。こんな明るい眼に涙の出る事實が、既に一つの悲劇であつた。いや、おたつの持つてゐる無邪氣な明るさこそ、物のあはれを告げる憐憫の姿であらう。――近藤はふと駒野を思つた。強い氣性でもなく、人に立ちまさつた意地でもなく、また女だてらの小賢しい教養でもなく、たゞ人の世の物のあはれを、おたつの無邪氣な姿に見て、理窟なしに不愍をかけて愛しんだ久坂の心持が、親しく解るやうな氣さへした。

「おたつさん、いろ〳〵と久坂さんのお話を聞かしては下さらんか。」

「よう訪ねとくれやした。そやけど、別に、なんにもお話することはあらしまへん。たゞえゝお方どした。生きてゝくれはつたら、と思ふばつかりどす。」

それはその通りであらう。理窟なしに愛してくれた人に、理窟なしに頼つてゐられた幸福がすべてであつて、その幸福以上に、何を取立てゝ語ることが出來よう。生きてゐてくれたら。――それだけがおたつに取つては、久坂を語る千萬言であつた。近藤もまたこの女から、千萬言を聞いたやうな氣がした。

夜を包んで降る雨の、しめやかに庭木の葉を打つ氣配が、靜かに忙しかつた。

「最後に逢はれたのは、いつでしたな。」

「あの戰爭のちよつと前どした。いよいよ戰爭になるらしいいうて、あては島原の知合のお家へ逃げてました。久坂はんは天王山の陣所から、駕籠でわざ〳〵角屋はんまで、來とくれやしたんどすのに、角屋はんたら酷しいお達しもあるし、新選組の屯所も近いさかいいやはつて、表で斷つて、久坂はんを揚げてくれはらしまへなんだ。久坂はんは仕方なく、お歸りやしたさうにおす。虫が知

らしたのどすやろか。丁度間よう、あてがその後へ行きましたんどすえ。いま久坂はんがお越しやして、歸らはつたとこやと聞くなり、あては下駄も何も脱ぎ飛ばして、洗足のまんま追ひかけました。今おもふと、人が見やはつたら、それこそ氣違ひどしたやろな。千本通りを、どんどん南へ走つて、東寺さんの裏の方で、やうよう追着きました。追着きましたけど、何にもいへんで、たゞ泣くばつかりどした。……久坂はんがいろ〳〵と慰めとくれやすのどすけど、何を聞いたやら判らしまへん。たゞおれもどうなるか判らん、躰を大事にせえといふとくれやしたのだけ覺えてます。……持つといやしたお金を、みんなくれはりました上、そんな時にも、あての足から血が出てるのを氣遣うとくれやして、御自分の駕籠で、あてを送らしてくれはりました。……これがお別れかも知れんと判つてながら、ほんまに阿呆どした。何であの時もつともつと、あれもこれも、お話しせなんだやろと、後になつて、自分が齒庠うてなりまへんのどすえ。」

今もまだその時の心殘りを追ふやうに、おたつは唇を嚙んで嗚咽するのであつた。

「しかしおたつさん。さうして最後まで、久坂さんに劬られたあんたは仕合せ者だ。京の女で久坂さんに惚れた者は大勢あるが、愛されたのはあんた一人だ。」

「さうどすやろか。亡うなつておしまひやした今になつては、知らなんだ方が、仕合せやなかつたやろかと思ひますのやけど。……」

「それも尤もだが、望んで叶はなかつた女達に較べれば、短くとも、希ひの叶つたあんたは仕合せだつたと、さう思つて諦めるんだな。懇ろに弔づてお上げなさるがいい。」

「……」

おたつは俛れて、肩に波を刻んでゐた。

「何か、久坂さんの書かれたものでも、殘つてゐますまいか。」

「さうどすな。別段お書きやしたもんは。……たつた一遍、あてにおくれやしたお便りぐらゐなもんどすけど、そんなもんでは失禮におすし。……」

「いや結構です。お差支なくば、その便りを見せて頂けますまいか。」

「お易いことです。」

おたつは奥の間へ立つて、手文庫から取出して來た卷紙の便りを、近藤の前に差出した。

「お羞かしおすけど。……」

「有難う。」

近藤は卷紙を展げた。

その後は如何案じ致し參らせ候。私事俄かに國へ歸らずてはならぬ事差起り目もじも致し不申心ならぬ事いかにも推もじ被成べく願ひ參らせ候。この節の事はおもしろからぬ事許りにて、國に歸らずてはならぬ次第になり何とも口惜しき事に候。さて出足の折おかしき事ながら、

桂の川の水鳥の、たちのなげきに旅ごろも、あかつきくらき村しぐれ、涙をしぼるたもとなれ。

大内はいづこもわかぬ、駒さへさすがいばえけり、へだての雲と加茂川に、のぼるのぎりぞかなしけれ。

と今様うたひて出足致し參らせ候。我事の心ずゐもじなさるべくねんじ參らせ候。その後もお前様の事のみおもひつゞけ候。軒端の月に露とすむ、寒き夕べは手枕に、つひねらねばたちばなの匂へる妹の戀しけれ。

初めて見る松下村塾の逸材、久坂玄瑞の見事な筆蹟であつた。近藤は飽かず眺め、繰返し讀んだ。

「一昨年の八月十八日の、あの騒動の折のお便りですな。」

「さうどす。お國へお歸りやす時、途中からおくれやしたお便りどす。」

「見事なものだ。惜しい人を死なせた。……おたつさん、この上更けては御迷惑をおける。わたしはこれでお暇するが、夜中のこととて、手土産も持參せずに來ました。失禮だが、これでお供物でも整へて頂きたい。」

近藤は懐中から、用意して來た金包を取出した。小判にして餘程の額に見えた。

「いんえ、そんな御心配は、どうぞおやめやしとくれやす。」

「佛への志だ。受けて下さい。夜中に飛んだ御迷惑をかけましたな。」

近藤が起つと、おたつは追ふやうに立上つた。

「ほんなら、もうお歸りどすか。あんたはんの御名とお名前を。……」

「いや、久坂さんの名を慕ふ、大勢の武士の中の一人に過ぎん者だ。いづれ再會の折があるでせう。その折にはお解りになる。……躰を大切になさるがよい。」

おたつに見送られて外へ出た近藤は、傘をさして、緩りと闇のぬかるみに足駄を運んだ。雨は漸く小降りになつてゐた。闇が薄白いのは氣溫が昇つて、霧を湧かせてゐるのであらう。

（久坂君。――）

心の裡に近藤は呼びかけた。それ程久坂を親しく身近に感じてゐた。

（――あんたは可愛い女を愛された。おたつを愛されたあんたの心持は、僕にも解るやうな氣がする。……僕は多くの女の面倒を見てゐる。が、あんたがおたつを愛されたやうに、愛してゐるのは駒

野ひとりだ。僕は不思議に、あんたと相撲を取つてゐるやうな氣がしてならぬが、女の點では、どうやらあんたの氣持が親へる。これは勝負なしだ。しかしあんたの識見は、やはり僕には親へない。考へて見れば、遙々君尾に逢ひに行つたのも、おたつを訪ねたのも、あんたの學識、あんたの識見が知りたかつたがためだ。僕は、大きな思違ひをしてゐた。宴席に侍らす歌妓や世話する女に、あんたが學識の蘊奥を傾けておいた筈もなく、また得意になつて、卓見を吐露しておいた筈もあるまい。そんなあんたであつたら、僕はあんたのゐない後までも、かうして相撲を取る必要はなかつたのだ。たゞあんたの噂を耳にする度に、僕にはあんたの姿が、大きく見えて來るばかりだ。悲運を喞つ途々の即興の歌、僅かに女に送つた消息文を見たゞけで、僕は無條件に感映し、涙が滾れる。……あんたは常に、肚の底に立派な死の覺悟を持つてゐたらしい。座興の呟にも、あんたを語る者の言葉にも、それが反映してゐる。しかし、あんたは死を早まつた。死んで何の意義があらう。死に何の歡びがあらう。あんた程の人間も、死と共に消滅したではないか。あんたの仕事は中斷されたではないか。――）

近藤は現に自ら話しかけてゐる相手が、自分の腦裡に「生きてゐる久坂」であることに氣づかなかつた。偉大な一つの精神が死後に生きる有様は、敵中にあつては、かくも麟然と屹立して敵を支配し、味方の中にあつては、そのまゝ繼承されて活動の原動力となつてゐるのに氣付かなかつた。

（――不思議なあんただ。大きな野望を抱きながら、それを挫折する死に徹して、しかも悠々と粹人になり、飄平と風流を愉んでゐた。なぜさうしてゐられたのか、なぜまたそれ程のあんたが、脱出すれば出來た筈の鷹司關白邸に踏止まつて、戰火の中に屠腹したのか。同じ場所から客將の眞木和泉を、天王山へ落したあんたの心持が解らない。戰の主唱者であつた眞木が、天王山まで脱れながら、責任をとつて自刄したのは肯ける。僕に解らぬのは、その眞木を落して、自ら死を早めたあんたの心懐だ。……味方であれば、もつとあんたの偉さが解つたであらうと君尾がいつた。一歌妓に過ぎない女の言だが、これは事實であらう。正直あんたが既にゐないことは、誰がゐないことよりも僕には心殘りだ。もはや永久にあんたを解くことが出來ぬと思ふと、この上なく殘念だ。あんたは僕を、いや新選組を、冷やかに笑つて死んだかも知れぬ。近藤勇は無學無教養であんたに敗れた。しかし近藤個人は敗れても、時代の正道を行く新選組全體は、あんたに負けないつもりでゐる。近藤勇は無學ではあるが、正直と至誠の點に至つては、あんた方才學狡智の野心家に、毫も讓るところはない。僕は斷言する。無學無教養必ずしも不正直にあらず。才學智識必ずしも正道にあらず。佐幕派と稱ばれるなら、僕は誇を以てその名を甘受する。何と呼ばれても正しい者は正し

いと、僕は信じてゐるのだ。あんた方勤王派の巧妙な言論は、惜しい僕の同志山南敬助を奪つた。かくいふ僕も、愚かにも一時は迷つた。まことに痛痕この上もない。しかし近藤はもう迷はぬ。——久坂さん。山南君。新選組は今後、益々峻烈にその任務を果して行く。幕府が、守護職が、朝敵の誤りを犯さぬ限り、新選組は毫も方針を變へる必要はないのだ。——)

これが現實を見て、思考し得る限りの近藤の解釋であつた。近藤は吻と心が輕くなつた氣がした。朝からの憂悶が溶けるやうに晴れて行つた。

いつしか雨もあがつて、鬱に滲んだ提燈の灯が、漁火のやうに動いてゐた。

不夜の里島原はもう間近かつた。

春暮るる

一

強談の結果、遂に西本願寺を屈服せしめた新選組は、直ちに集會所の手入れに取掛り、その完了と共に住馴れた壬生の屯所を引拂つて、本願寺へ移つた。移轉と同時に隊の更新を目指して、左の如き職制を編成した。

總長　近藤勇　副長　土方歳三　參謀　伊東甲子太郎

組長　一番隊沖田總司　二番隊永倉新八　三番隊齋藤一　四番隊松原忠司　五番隊武田觀柳齋

六番隊井上源三郎　七番隊谷三十郎　八番隊藤堂平助　九番隊鈴木三樹三郎　十番隊原田

左之助

伍長　島田魁　川島勝司　林信太郎　前野五郎　阿部十郎　久米部正親　加納鶴雄　中西登　富山彌兵衛　池田小太郎　橋本皆助　茨木司　外

一隊は組長一名、伍長二名、隊士十名より成つてゐた。他に

諸士取調役並監察　山崎丞　篠原泰之進　新井忠雄　服部武雄　吉村貫一郎　尾形俊太郎

勘定方　川合耆三郎

劍術師範　沖田總司　永倉新八　齋藤一　新井忠雄　池田小太郎　吉村貫一郎　田中寅雄

柔術師範　篠原泰之進　松原忠司　梁田佐太郎

文學師範　伊東甲子太郎　尾形俊太郎　武田觀柳齋　毛内有之進

砲術師範　清原清　阿部十郎
馬術師範　安富才輔
槍術師範　谷三十郎

天氣の良い日は、自ら軍師氣取りの永沼流の兵學者武田觀柳齋が、數隊を率ゐて調練に出掛けた。夜と雨の日は、伊東以下文學師範の講議があつた。近藤は時に白馬に跨つて、調練を視察に出掛け、またある時は講堂に這入つて、熱心に伊東の講議を傾聽した。毎日武技の耐錬が行はれ、清原清、と阿部十郎の指導下に、二門の大砲が交互に轟いた。

隊は對外交渉に識見ある、溫厚な伊東を得て名實共に重きを加へ、整備と威風は遙かに小藩の大名を凌いだ。武田觀柳の如きは、隊士はいづれも、局長を主君と仰いでゐるなどゝ、近藤に告けて阿諛した。近藤は得意であつた。

が、近藤の得意にも拘らず、益々狼狽したのは本願寺であつた。鐘の代りに大砲が轟き、木魚の代りに竹刀の音が響く。そして誦經に代るものは、拷問に苦しむ浪士や、町人達の悲痛な呻きだつた。

大砲を擊つことだけは、門主から會津侯へ泣きついて、漸く止めてもらつた。が、三日に一度は捕へて來た者や、隊規違反の隊士の斷首や切腹が行はれた。竹矢來越しに、本堂からそれが見えるのはまだしも、猪賣りを呼込んで肉を買ひ、鍋で煮て喰ふ匂ひが、ぷんぷん匂つてくるといふ始末。

さすがの本願寺も遂に辛抱し切れなくなつて、局長と談合の上、新選組の屯所用地として、堀川通の東、大津屋橋の南に當る不動堂村に、一町四方の土地を買つて提供することにした。その上新築費用の半分は、本願寺に於て負擔するといふのであるから、これは近藤にとつて、渡りに舟の有難い話であつた。これ程充實整備した新選組が、未だに確固たる本據を持たず、寺の間借りに等しい有樣でゐることは、隊の威信にも關すると同時に、百疊もある廣間を、不自然に仕切つて雜居してゐることは、統制の上に於ても、都合の惡いことが多かつた。何よりも浪人の集團臭さから脫したいのが、近藤の望みであつた。

敷地の見取圖が出來上ると、早速新築工事に取掛つた。それによると表門、高塀、長屋、物見、仲間小者の部屋から勝手元、隊務を取る大廣間、總長、副長、參謀の居室、接見の間、長廊下等、宛然大名屋敷の堂々たる體裁を備へてゐた。

この間に、國內問題と外交問題が絡んで、政局の動きはまた複雜の色を呈してゐた。去年からの詔命であつた三度目の將軍の上洛は、五月に這入つて漸く實現された。それはむしろ事情に迫られ

て、長州再征の勅許を仰ぐためであつた。小牧山から關ケ原の原頭、大坂陣の城邊に打樅てられた、戰勝の歴史に耀く金扇の馬印は、今や二百幾十年の星霜を經て、再び大坂に進められた。

然るに、朝廷は「泰平の策を行ひ、防長の事は衆議を盡して言上すべく、暫く大坂に滯留して公武一和の策を講ずべし」と御沙汰せられ、征長の勅許は下されなかつた。これは「既に伏罪したる者を討つの謂なし」と、再征に反對する薩藩をはじめ、尾、越、阿波、備前、肥後、津等、諸藩の長州に對する同情が意外に強いことの反映と見られた。

内實は幕府自身も財政難から、再征は望みでなかつた。さればこそ、長藩主父子並に三條等五卿を江戸に召下して、處置を終へようと圖つたのであつたが、筑前の五卿召下しには失敗し、長藩には命を拒まれ、面目は丸潰れとなつてしまつた。

それのみならず幕府は苦しい財政から、馬關戰爭の償金三百萬弗といふものを、長藩のために尻拭ひさせられてゐるのだ。その苦い目をみせられた上に、嘉命には從はず、國内戰備を固めてゐるといふに至つては、望むと否とにかゝはらず、長藩再征の旗を進めることは、幕府の陷つた宿命的陷穽に等しいものとなつてしまつた。

再征の勅許を見るに至らず、一旦大坂城に退いた家茂は、再三長藩家老、支藩毛利淡路、吉川監物等に召命を發したが、依然病と稱して應ずる氣配がなかつた。

恭順、謹慎、待罪を誓つた長藩の態度が、かくも硬化するに至つたのは、藩情が顛覆してゐた結果であつた。長藩本國では、主戰派の領袖高杉晉作の蹶起に端を發して、椋梨等保守溫和派が掃滅せられ、藩府の權は完全に主戰派の手中に還つてゐたので、一戰なくしては解決の望みなき情勢であつた。

こゝに於て將軍家茂は再び入京し、一橋慶喜並に會桑二藩一體となつて、もし長州再征の御裁下なきに於ては、將軍以下悉く職を辭して東歸すべしとまで切言して朝廷に迫つた。その結果は遂に九月二十一日、暴々たる反對論を押切つて、勅許を拜することに成功した。將軍は欣躍して大坂城へ入り、もはや馬印を西に進めるばかりとなつた。

しかもこの時、突如として思ひもかけぬ障壁が幕府の前面に立塞がつた。即ち英、米、佛、蘭の聯合艦隊が各國公使を乘せて、暴風の如く九月の攝海を襲ひ、不意に兵庫の開港を迫つて來たのであつた。

四ケ國公使の要求は、兵庫の先期開港、安政條約の勅許、海關税の改正の三件であつた。朝廷關係と攘夷問題の紛糾を理解して來た四ケ國は、假條約の實行を危ぶみ、將軍西上によつて、京攝

の地が一時的にも政治上の中心になつてゐる機會を捉へ、先期開港を要求して要鎖を得なければ、直接朝廷に迫らうとの氣配さへ見せてゐた。

上下共に色を失つた。軍艦九隻の威嚇に、京攝の地は薩英、馬關兩戰爭の噂が、こゝにも實現するものと信じ、動搖と騒亂は一と通りではなかつた。

幕府は征長問題をそこ退けにして、この問題に沒頭しなければならなかつた。幕府は朝廷に三件の審議を奏請し、在京十五藩三十餘人を召しての大會議となり、朝野を擧げて紛糾を重ねる論議の中に、遂に安政條約は勅許をみるに至つた。これには中川宮の開港說御支持があり、條理を盡した時勢論を以て、屠腹して責を引くとまで切言した一橋慶喜の熱辯が、大いに力をいたした。が、兵庫開港の一事だけは勅許を見るに至らなかつた。

英公使パークスの不滿はあつたが、先期開港の無理を知つてゐた公使團は、結局安政條約の勅許に一應滿足して、艦隊を横濱へ廻した。京攝の騒擾のみならず、井伊大老の專斷以來、國論を鼎沸させた前後八ケ年に渡る難件も、こゝに一と先づ終結を告げ、外艦の拔錨と共に實に、颱風一過の觀があつた。

かくて、攘夷論は尊王論と分離せられる時が來ると、幕府は再び長州問題に頭を廻らした。

伊東の補捉的說明を得られる近藤は、今度は政局の消息に通曉することが出來た。その結果、近藤は薩長を憎むことが一層甚だしかつた。——馬關戰爭の尻拭ひをさせた恩ある幕府の命を拒み、內に戰備を固める長藩の態度、そしてこの理由なき長藩の反抗を、陰に陽に庇護する薩藩の裏切は、近藤をして義憤の極に達せしめた。近藤には、どうして幕府の親藩まで加へた諸藩が、長藩に同情を示すのかが判らなかつた。佐幕の名を自ら嫌ふ近藤も、幕府の立場に同情せずにはゐられなくなつてゐた。

「今度の外艦の攝海入航も、幕府の長州再征を牽制するために、薩藩が策したといふではありませんか。」

近藤の痛憤に、伊東は微笑した。

「それは噂に過ぎますまい。いろんな風評があります。薩藩の策だともいひ、また反對に阿部閣老が、尊攘派の公卿浪士に外國の威風を見せて、攘夷鎖港論を逼息させる手段に、使つたのだともいはれますが、これはやはり、四ケ國公使が國內情勢を見て、焦慮した結果だと見るのが至當でせう。」

「さうですかな……」と近藤は何とも決め難いといふ表情をして、「ところで伊東さん、僕にはどう

も解らぬことがある。あれ程攘夷々々と騒いだ浪士共が、今度の條約勅許については、鳴を鎮めてをる。實は一騒ぎ遣るものと見越して、僕は手具脛引いてをつたが、まつたく意外だ。」

これにも伊東は微笑を酬ひた。

「いや、彼等は今更騒ぎますまい、攘夷論は今日まで、勤王浪士の口實になつてをつたに過ぎません。攘夷論が攘夷のみを目的にしたのは、沖に泛んだ黒船を打攘へば、攘夷の實が擧ると誤信してゐた間だけです。今日では海外諸國の實力が解つてをる。象山先生を斬つた川上彦齋のやうに、勤王郎攘夷と考へてをる單純な者もをりますが、しかし領袖といはれる連中は、疾くに和親、開港、交易の已むを得ざる大勢を知つてをります。攘夷を遣るにしても、交易によつて國力を富ませ、武力を養ひ、諸外國に抗する國内の充實を圖つた上でなければ、徒らに國土を外夷の蹂躙に、委せる外はないことを知つてをります。たとへば近頃頻りに噂を聞く、土佐の坂本龍馬などは、既に勤王同志を以て一隊を組織し、海運業に携つてをるといふではありませんか。これを以て見ても、今日の勤王浪士の風潮は窺へませう。現に攘夷の淵叢のやうに見える長州ですら、外國から歸朝した井上聞多や、伊藤俊輔等の新知識がをつて、藩一般は海外に眼を開いてをるのです。死んだ久坂や吉田、入江、寺島、また高杉、桂、山縣、村田等は、いづれも吉田松陰の門に學んだ者です。その松陰は象山先生の門下で、しかも海外へ密航を企て、罪を得たことはあなたも御承知でせう。これを以ても知られる通り、もともと彼等は攘夷論者でなかつた。偶々憂慮が攘夷であつたために、彼等の勤王論が、攘夷論と結びついたに過ぎない。だから攘夷は、時に取つての武器であり假面であつた。彼等は今こそ假面を脱ぐことが出來て、却つて吻としてをりませう。條約勅許に騒ぎ立てないのは、むしろ當然だといふべきです。」

「それでは幕府の方針と、何等異る處はない。意に反した攘夷論を以て、罪のない幕府を、故意に苦しめてをつたのは不埒だが、今後の浪士共には、幕府を苦しめる口實が失はれたわけですな。」

近藤は些かの快を見せた。

「ところがかうなると、勤王論は本來の相に還つて、一路倒幕を目指すことになります。それはもはや表向に倒幕を振聲しても、直ちに處分が出來ぬ程、幕府の衰退してをるのが判つてをるからです。彼等が攘夷を武器に騒ぎ立てた數年間に、幕府は、遺憾なく威令の行はれぬ弱體振りと、財政難とを曝してしまつた。それに反して、朝譜は蒙づてをるにしても、浪士が背景と恃む長藩は、藩府の權が主戰派、所謂勤王派の掌中に握られ、薩藩もまた老公の最初の意に反して、西郷、大久保等勤王派の擡頭に、藩論が統一されて、長藩と同じ藩情になつてをる。この二大雄藩は、衰弱し

た幕府に拮抗し得るだけに、浪士達には、機が熟したといふことになるわけです。長州が戰備を固めてをるのは、單に幕軍に備へると見るよりは、もつと積極力のある倒幕精神の現れだと見なければなりますまい。」

「すると、長州は自藩一藩の力で、倒幕が可能だと信じてをるのでせうか。」

「勿論彼等は、自己の力の限度を知つてをりませう。しかし大勢が陰に陽に、長藩を支持してをることに頼つてをります。幕府の親藩さへ加へた有力諸藩が、長藩に同情を寄せてをる。薩藩の如きは、先づ幕命を奉ずるよりは、長藩と結ぶものと見なければなりますまい。その他の諸藩にした處で、果して幕命を奉じて、長藩と戰ふ意志があるかどうかは、大きな疑問です。こゝに長藩の強いところがあり、幕府の弱點があるのです。」

「伊東さん、大勢といはれたが、大勢とは何です。僕には宗家の苦境を見ながら、宗家を援けるよりも、朝敵たる長州に同情するといふ、親藩の心事が解らない。しかも朝譴を蒙つてをる長州が、依然勤王面をして倒幕を策してをるといふのに、親藩の雄藩が幕府を援けないのは、どういふ次第ですか。」

「それは複雜な問題です。將軍繼嗣問題によつて、幕閣と衝突した親藩及び外樣諸藩の、安政以來の感情の縺れは別にするとして、最も簡單にいへば、諸藩が朝廷を中心に諸事を判斷し、進退する傾向になつてをることが原因です。幕府の臣下であるか、朝廷の臣下であるか、この分明であつて、然も二百餘年來等閑に附されてをつた問題を、改めて考へ直さなければならなくなつた結果です。これが卽ち大勢です。そしてこの大勢を招來したものは勤王論です。勤王論は、宇內に冠絕した萬世一系、皇統連綿たる我が皇室の尊嚴と、君臣の分義を辨ずることに發し、皇室の式微を嘆き、政を王朝の古に復さうと翹望するにあります。王政復古、祭政一致の實現こそ、勤王論者の目的とする處です。頼朝公の鎌倉幕府創設以來、六百年の長きに亘つて、兵政の權は武家の手に移つてをつたが、今やその誤りであることが闡明せられた。かくして勤王論者にとつては、たとひ幕府が如何に叡慮に沿ひ奉らうとも、幕府の存在自體が一敵國をなしてをる。從つて無理も矛盾も承知の上で、幕府の壞滅を圖る、そのためには手段を選ばない。彼等には無暴もあれば暴擧もある。然もなほ勤王派と稱せられる所以は、卽ち目的を倒幕と、王政復古に置いてゐるがためです。長州も同樣、採り來つた手段は過激に過ぎ、暴擧に過ぎたため、朝譴を蒙り、朝敵の汚名を受けましたが、長州自身は、それを勤王倒幕の道の艱難だとしてをるでせう。この勤王倒幕を目指す不屈の精神こそ、長藩をして衆望を失はしめず、且つ一面に幕府の恩顧を知る諸藩をも、なほ同情者たらしめて

るる所以です。」

伊東は機會ある毎に「彼等」に藉口しておのれを語り、「說明」に托して近藤の蒙を啓かうとした。いつも敢て說得に努めなかつたのは、對立して喧嘩別れの結果になることを、危んだからであつた。彼は新選組の除士から、一人でも多くの同志を獲得しようと目論んでゐた。喧嘩別れは未だその時期ではなかつた。伊東はたゞ近藤の顏色を讀むことに止めた。

近藤は、伊東の說明の調子が不滿らしかつた。

「伊東さん、僕にも勤王論に異存はない。しかし政治の御委任を拜して、一意難局の打開に努めてゐる幕府を、どうして倒さなければならない理由があります。倒幕の必要は、幕府が朝敵となつた時以外にはありますまい。今日この難局に際して、一意叡旨に添ひ奉らうと努めてをる幕府は、何れの藩にも增して、立派に朝廷の臣下たる、分義を盡してゐるといはなければならない。僕の眼を以てすれば、眞に忠勤を致してをるのは幕府であつて、長州ではない。長州以下の浪士共は、口に勤王を唱へて、自己の野心を滿足させようとしてをるのに過ぎない。攘夷が彼等の口實であつたとすれば、勤王もまた彼等の口實だ。德川幕府の後に毛利幕府、島津幕府を打ち樹てようとしてをるに過ぎない。でなければ策の多い薩藩は、名目を憚つて、薩長聯合の勤王幕府を目論んでをるのだ。僕は彼等の奸策に奔弄される、幕府の立場に同情を禁じ得ない。遽かに征長の軍を進めるべきだ。僕はこの度の紀問使に隨行して、長州入りをする。そして薩長の接近がどの程度に行はれてゐるか、飽くまで彼等の奸謀を探索して見ようと思ふ。」

伊東は議論になることを避けて、それ以上はいはなかつた。近藤が長州入りをするとすれば、伊東には伊東の策があつた。

二

慶應元年十一月、長藩紀問使大目附永井主水正尙志、目附戸川鉾三郎、松野孫八郎等の出發に續いて、幕府は藝州、肥前以下三十一藩に出兵の準備を命じた。

先鋒總督紀伊茂承以下の幕兵は、藝州口、石州口、上關口、下關口の部署を定め、表口たる藝州口の彦根、高田の兩藩へは最新の訓練になる幕府自慢の步、騎、砲の三隊を添へた。が、これ等の出兵も準備命令も、なかば以上は虎面威嚇の示威たるに止まつた。

板倉勝靜、小笠原長行の兩閣老は、諸藩の情勢と財政難とから開戰を好まず、兵を動かさずに長

藩を屈服せしめることに腐心してゐた。再三召命を拒んだ長藩に對して、こちらから使を派してまで、糺問によつて局面を打開しようとするのも、穩健な交渉に圓熟の手腕を有する永井、戸川を糺問使に撰んだのも、このために他ならなかつた。

近藤は會津侯に願つて、糺問使の隨行を許された。一行四名、近藤は內藏助と假稱して永井の給人となり、伊東甲子太郎は中小姓、武田觀柳齋は近習、尾形俊太郎は徒士として隨つた。かく文學師範のみを揃へたのは、長藩の使者や隨員に接觸する關係と、專ら長藩の內情探索を目的としたからであつた。

この他に二人、伊東の獻策によつて撰ばれた赤根武人と淵上郁太郎が、近藤達に同行してゐた。赤根はもと長州奇兵隊の幹部であつたが、高杉と衝突して脫藩し、久留米脫藩の淵上と共に、米屋に變裝して大坂に潛んでゐた勤王志士であつた。淵上は桂と同樣、池田屋事件の折の畫策に加盟してゐたが、當夜居合さずして難を免れた一人であつた。

二人とも大坂で捕はれ、京の六角獄に繫がれた。伊東は近藤に說いてこの二人を救ひ出した。近藤は西下に際してこの二人を長藩探索の手先に利用しようとし、伊東は二人を介して、秘かに長藩志士への接近の手蔓にしようと計つた。二人は伊東の勤王運動と結んで後圖を策し、一時近藤の手先になることに甘んじたのであつた。

廣島に這入つた糺問使の召命に應じて、長藩からは老臣宍戸備前の養子備後介、木梨彥右衞門等が使節として出て來た。が、宍戸備後介が奇兵隊上りの輕輩で、俄か仕立の老臣の養子であることは直ぐに判明した。穩健の旨を含められてゐる永井尙志は、この備後介を長藩の代表と認めて、八ケ條の疑議を糺さねばならなかつた。

毛利父子が取壞しを命ぜられた山口城へ居を移したことから、武器を購入して戰備を固め、再三の召命に應じない點まで、八ケ條に分けられた嫌疑に對して、宍戸備後の辯疏は巧妙を極め、辯解の中に哀訴あり、哀訴の裏に不屈の示威があつて、强辯儀禮交々、結局は幕府との一戰敢えて辭せずとの、强腰を充分利かした上の陳辯であつた。

相手の肚は見え透いてゐたが、幕府の糺問自體が形式に過ぎない以上、永井は一應陳辯の筋の通つてゐるのを諒として、糺問を打切るより仕方がなかつた。

滯在約一ケ月の後、十二月十六日に至つて、永井の一行は宿舍たる廣島の國泰寺を引拂つた。

糺問使は「毛利父子は去年同樣、尙謹愼恭順の意を失はず」と幕府に復答し、相手の自判書を差出した。が、近藤が會津侯に呈した報告は、家老と稱して應待せる宍戸備後介は、俄養子の輕輩

である事、衷に謹慎を装ひ、秘かに戰備を急いでゐる事、山口に會議所を設け、諸隊の代表者を以て諸事件を審議してゐる事、幕命による倒封の沙汰に、應ずる氣配の毛頭ない事等、まつたく正使の復答の裏を行くものばかりであつた。

近藤等は歸洛と共に、不動堂村の新本營へ遷入つた。十一月に新築が成つて、近藤等の不在中に本願寺を引拂ひ、土方が指揮して移轉を完了してゐた。この大名屋敷然たる本營の居室に在つて、近藤は長州問題の形勢を觀望してゐた。

會津容保は、近藤の報告に基いて幕府に獻言するところがあつたが、飽くまで平和主義を採つて、永井等の復答に重點を置いた幕府は、明けて慶應二年正月二十一日、謹慎恭順を諒として、長藩朝敵の罪名を除き、封十萬石を削つて敬親には隱居蟄居、廣封には永蟄居、廣封の子興丸を家督と定め、三家老の家名永世斷絶といふ處分を決定し、これを奏上して勅許を得た。

二月、小笠原長行は幕命を長藩に傳へるために、永井以下を引連れて廣島へ出張したが、召命を發した毛利讃岐、毛利左京、毛利淡路、支族吉川監物及び二家老は、病と稱して遂に出て來なかつた。

三月二十六日、重ねて藩主父子興丸の出藝を命じ、更に四月二日には期限付の召命を發して、漸く廣島國泰寺に揃つた顔ぶれは、父子孫三人の名代宍戸備後介以下、三末家、支藩、家老の名代はかりであつた。

散々に翻弄された長行は、それでも已むを得ず名代を認めて、五月一日幕命を傳へ、廿日までの期限を附して高杉晉作、木戸準一郎（桂）以下激派の領袖十餘名の、廣島護送を命じた。が、期限になつても何等の音沙汰なく、漸く長藩が意志表示をしたのは、期限に遲れること五日、五月二十五日であつた。それも三末家、支藩、四家の聯名で、幕府の裁許狀は宗家へ傳達することを得ずといふ峻拒で、薩藩の手を經て申出て來たのであつた。

かくして幕府と長藩の間は、完全に手切れとなつてしまつた。幕府は直ちに諸藩へ開戰を布達した。

これより先、薩藩は四月十七日幕府に一書を呈して、出兵を辭してゐた。これは長藩との密約に基いたものであつた。

去年の五月將軍三度目の上洛によつて、再度征長の氣配が濃厚になつて來ると共に、薩長提携の機は漸く熟して來たが、兩藩も周圍もそれを望んでゐながら、文久の八月十八日の政變以來、蛤門では互ひに砲火を交へた犬猿の間柄であつただけに、實際問題としては感情上の困難を伴ひ、

相方から手を出すばかりの機會を逸することが屢々あつた。

この間に立つて、土佐の坂本龍馬と中岡慎太郎は、必死になつて兩者を斡旋した。幕府が外交問題に沒頭するや、天佑この機にありとなして奔走に努め、遂にこの一月二十三日、兩藩をして密約を結ばせることに成功した。會合は京の薩邸に行はれ、小松帶刀、西郷吉之助は、上洛の木戸準一郎を迎へて、坂本龍馬が立會つた。この時、伏見奉行の手の者は旅宿寺田屋に坂本を襲つたが、勿論それ程の密謀があると知つてのことではなかつた。

一、戰と相成候時は直樣二千餘の兵を急速差登し、只今在京の兵と合し、浪華へは千程は差置京阪兩所相固め候事。

一、戰自然我勝利と相成候氣鋒有之候とも、其筋朝廷へ申上屹度盡力次第有之候との事。

一、萬一戰負色に有之候とも、一年や半年に決而潰滅致候と申す事は無之に付、其間には必ず盡力の次第屹度有之度との事。

一、是なりにて幕兵東歸せしときは、屹度朝廷へ申上直樣寃罪は從朝廷御免に相成候都合に屹度盡力との事。

一、兵士ども上國の上、橋、會、桑等も如只今次第に而、勿體なくも、朝廷を擁し奉り、正義を抗み、周旋盡力之道を相遮り候ときは、終に及決戰候外無之との事。

一、寃罪御免の上は双方誠心を以て相合し、皇國の御爲めに碎身盡力仕候事は不及申、イズレの道にしても、今日より双方皇國之御爲め皇威相暉き、御回復に立至り候を目途に誠心を盡して盡力可致との事。

坂本龍馬の裏書

表に御記被成候六條は、小、西、兩氏及老兄、龍等も同席に談論せし所にて、毫も相違無之、後來といへども、決して變り候事無之は神明之知る所に御座候。坂本龍

密約は口頭を以て行はれた。用意周到な木戸はそれを右の如き簡條書にして坂本に送り、坂本の裏書を求めたのであつた。

かくして維新回天の母胎は成つた。幕府は長藩のために散々弄された上、戰備が整ひ、薩藩との聯衡成るに及んで突放された。

愈々開戰と決するや、今度も小笠原長行に隨行して來てゐた近藤勇等は、急遽歸洛して、新選組の參戰を會津侯に願ひ出たが許されなかつた。近藤は腕を撫して切齒しながら、征長戰の成行を傍觀してゐる他はなかつた。

五十餘日の廣島滯在中、赤根と瀧上は長藩の者に捕はれて、間諜の疑ひで奇兵隊へ引渡されてしまつた。二人には隨員の名目がなく、近藤の方でも、表立つてどうすることも出來なかつた。

征長の幕軍は、連戰連敗で完き失敗に終り、家康以來の金扇の馬印も、今は僅かに長州一藩をも征し能はぬ、骨董品たるに止まることを、遺憾なく天下に曝した。しかも戰がいまだ局を結ばぬ七月二十日、將軍家茂は大坂城にあつて脚氣が昂じ、獨り卒然と世を去つてしまつた。

慶喜は强硬な征長の主唱者であつた。ひとまづ將軍の喪を秘して自身出馬し、戰局の打開に當らうと意を決したが、既に石州一圓は長藩の手中に落ちた上に、小倉落城が傳へられ、この方面の將小笠原長行が逃げ歸つたことは、もはや頹勢挽回の不可能なることを自覺せしめた。

そこで慶喜は休戰の御沙汰を奏請し、八月廿日勅許があつて「將軍薨去により姑く征長の師を休めしむるに於ては、長藩も遠かに隣境の侵地を引拂ふべし」と仰せ出されるに及び、將軍の喪と共に、自身の宗家相續をも併せて發表した。

諸道の征長軍は續々引揚げ、九月二日嚴島に於て、長藩との間に休戰條約が結ばれた。

九月七日、朝廷は國事會議のために尾、薩、土、宇和島以下二十四藩に召命を發せられたが、有力諸侯の多くは形勢を觀望して動かず、越前侯春嶽の如きは、在京してゐながら命に背いて歸國するといふ有樣であつた。

この形勢を見ると、伊東甲子太郎は篠原泰之進を帶同して、急遽名古屋へ發つて行つた。第一回征長總督で穩和派の尾州侯の列席を懇請し、長藩赦免の斡旋を依賴せんがためであつた。伊東等は二度の西下の折、長藩の有志との間に、このことに就いての誓約を交はしてゐたのであつた。

三

幕府の敗戰は直ちに洛中潛伏の浪士に反映して、またまた張紙投書の類が盛に行はれ始めた。

近藤は不機嫌な顏に緊張の色を見せた。征長戰に參戰出來なかつたことも、幕府の敗戰も、かて加へて將軍薨去による幕府の悲運も、近藤に取つて痛憤の種ならざるはなかつた。京都こそ彼等朝賊共の跳梁から護つて見せる。――近藤はさう決意を固め、さう局中に宣言した。心中に惱みと迷ひがあると否とに拘らず、行動處斷の竹を割るが如きであつた近藤は、益々酷烈な態度を以て內外に對した。

恰もこの時、三條の制札斬り事件が勃發した。例の長州の宣傳戰に對抗して建てられた「禁闕に

發砲し、逆罪明白に付」云々の制札で、元治元年七月以來、三年越しの風雨に曝されて、文字の部分だけが高くなつた制札は、既に世人に忘れられてゐたが、征長軍の敗戰によつて、これがふと浪士の注意を惹いたのであらう。最初は通り掛りに引拔いて、踏み碎いて行つたのに過ぎなかつたが、奉行所では幕軍敗戰の矢先ではあり、そのままでは幕府の威信に關すると考へて、三日目の九月二日、舊文のまゝの制札を新調して立換へた。すると翌々四日の朝、その制札が何者にか斬られて、磧へ投棄てられてあつた。

これが忽ち市中の評判になつた。敗軍の癖に新らしい制札でもあるまいと笑ふ聲があり、成行を興がる者があり、物見高い町人が、恰も晒し首でも見るやうに、制札見物に三條大橋へ詰めかけるといふ有樣で、制札事件は奉行と浪士の、意地の張合を釀成する結果となつてしまつた。

躍起となつた奉行所では、十日、三度目の制札を立てると共に、守護職へ申入れて、警戒と犯人捕縛を新選組に依頼した。

「長州系の浪士共だ、手に餘れば斬つてしまへ」と近藤は命じた。

十番隊長の原田左之助が大將となつて、總勢三十六人三隊に別れ、劍道師範池田小太郎、監察新井忠雄、浪士取調役大石鍬次郎、伍長茨木司、それに沖田の劍に對抗するといはれる監察服部武雄なども加はつて、日が暮れると不動堂村の本營を出て行つた。淺野薫と橋本皆助の二人は斥候役で、菰をかぶつて乞食に化け、制札場附近に寢ることにきまつた。淺野は古い隊士で、一時副長助勤まで行つたが、橋本はまだ正式に入隊が許されてゐない新參の假隊士であつた。この男の腕と膽力を試すために淺野を附けて、近藤は斥候役を命じたのであらう。

十一日の朝、七番組の內海二郎が一人で本營へ歸つて來た。

「昨夜は警戒に努めてをりましたが、何事もありませんでした。原田さんの一隊は、先斗町會所、新井さんの一隊は、高瀨の酒屋、大石、茨木さんの一隊は、橋東の商家を借りて詰めてをりますが、浪士共を發見するまで歸營いたしませんからと、原田さんの傳言です。」

「さうか、御苦勞。確りやつてくれ。」

近藤はさういつて內海を部署へ歸したが、翌十二日は何の報告もなかつた。その夜は滿月に近い明るい月夜だつた。

「局長、今夜で三日目ですが、浪士共は出ないようですな。」

本營の庭で月を仰ぎながら土方がかういつた。居間で習字をしてゐた近藤は、筆を擱いて月を仰いだ。近藤は暇さへあれば、好きな山陽の字を手本に習字に熱中してゐた。

「隊の出張を、嗅ぎつけたのかも知れんな。」

「今夜もこの月では出て來ますまい。月のある間出張は無駄かも知れませんよ。」

こんな話をして寢に就いた翌早曉、原田以下三條出張隊は朝靄を衝いて歸つて來た。起床時刻になつてから、近藤以下幹部は隊務を執る大廣間に出揃つて、出張隊から戰況を聽取した。

原田の報告によると、昨夜九つ頃、加茂磧の南方から先斗町を川沿ひに、北行して來る一團の武士の姿が、月明の中に墨繪の如く浮び出た。見張りによつてそれと知つた原田の一隊は、果して制札荒しの浪士か否かを確めるために、遙かに離れて尾行して行つた。すると斥候の橋本皆助が宙を飛んで駈け戻つた。

「制札荒しだ。」

「やつぱりさうか。よし行け。」

原田の一隊は制札所へ馳せ着けた。浪士は八名、まさに制札を河中へ投込まうとしてゐるところであつた。原田達は拔き連れて斬込んだ。浪士達は不意打に一瞬たぢろいだが、忽ち拔刀して猛然と應戰した。そこへ最初に橋本の報告を受けた新井忠雄の一隊が、鉈を揃へて突進して來た。

他の一人の注進役淺野薫は、臆病から浪士達の背後を駈け拔けることが出來ず、流れを渡つて橋東へ報告に行つたために、大石、茨木の一隊は餘程遲れて駈け着けた。伏兵多しと見た浪士達は、いづれも月光に重輕傷の凄愴な鮮血姿のまゝ、磧へ駈け降りて逸走したが、内一人は斃れ、一人は重傷のために捕へられた。

斃れたのは土佐藩の安藤謙次で、同志を落さうと獨り踏止まつた爲めの討死であつた。捕へられたのは、同じ土佐藩の宮川助五郎。これは隊の今井祐次郎が斬り立てられてゐたのを、新井忠雄が飛込んで斬りつけた。浪士達はいづれも土州藩と知られた。

「味方は輕傷六名でした。何しろ自分が眞先に斬つて入つたので、隊士等の戰功の程は分り兼ねます。それを見分けてゐる餘裕のない程、相手は凄い奴等でした。」と原田は報告した。

「なかなかの殊勳だ。御苦勞だつた。新井君はどうだ。味方の働きの見分けがついたか。」と近藤は訊ねた。

新井は極り悪さうに頭を掻く眞似をした。

「實は丸つを過ぎると、今夜も來ないと思つて、僕はちと泥醉氣味で寢てをりました。そこへ橋本の注進で、飛起きて駈け出したまゝ斬込んだので、原田君と同樣、隊士の働きは甲乙を辯じ兼ねま

す。行動の機敏といひ働きといひ、僕は先づ橋本の殊勲を擧げます。それにしても長劍を眞向に振り翳して、月光の中を猛進して來る昨夜の相手は、まるで鬼神のやうな奴等でした。」

原田と同じやうに、新井も敵の凄さを口にした。近藤は滿足さうに頷いた。代つて土方が服部、池田の兩劍士に訊ねた。

「服部君、池田君はどうだつた。」

服部は池田と顏を見合した。

「遺憾ながら僕達は、注進を受けるのが遲れ、戰機を失して、戰鬪らしい戰鬪をせずにしまひました。」

大石も茨木もこの組であつた。

「僕達も同樣です。」と淺野薫を睨めつけた。それを氣の毒がるやうに橋本が口を挿んだ。

「僕は筑波以來、數十度の戰鬪に加はりましたが、昨夜のやうな烈戰をはじめて見ました。敵も小勢ながら凄かつたし、原田さん新井さんの働きは、實に凄じいものでした。」

「いづれも御苦勞だつた。早速守護職へ上申する。」宮川助五郎は一應取調べた上、町奉行へ引渡すことにする。それから橋本君には、改めて入隊を許下し、伍長を勸めて貰ふ。」

斷罪に苛辣な近藤は、褒賞に對しても果斷に富んでゐた。橋本皆助は制札事件の功によつて、一躍伍長の位置を占め、正式入隊が決つた。

間もなくこの事件に對する、會津侯の感狀と褒美とが下つた。同時にこの事件は、土佐藩内に長劍不可論を生み、疲勞による敗戰の經驗から、無反三尺四五寸といふ、當時流行の土佐藩士の長劍が、めつきり減ずるといふ現象を生むに至つた。

淺野薫はその後戰々恟々としてゐた。隊士處斷の苛酷な時であつたから、制札事件の不首尾が巢つて、何時士道不覺悟の斷案が下るか知れない。相役を勸めた橋本皆助が、一躍伍長に任ぜられたのも、自分への皮肉ととれないことはなかつた。

彼はあの場合、橋上を走るために浪士の背後をすり拔ければ、怪しい乞食奴と、一刀を浴せられることは明らかであつた。斬られるのは、新選組に取つても名譽なことではない。じやぶじやぶ川を渡つて、橋東へ走つたのは、彼としては萬全の策をとつたのだといひたかつた。が、そんな辯解は採り上げられる筈はなく、次に來るものは處斷の一途のみであつた。

今年に遣入つてから死んだ隊士は夥しい數に上つてゐる。創立以來の隊士で、近藤の信任厚く、共に會計方を勸めてゐた河合耆三郎、酒井兵庫の二人は、いづれも罪に問はれた。河合は出納の行

違ひといふ僅かな理由で切腹、酒井は隊士の處斷の苛辣に愛想を盡かして脱走したが、住吉の神官の家で沖田以下數名に斬られた。平隊士の芝田彦太郎と佐野牧太は、隊名で金策をして斷首。土方の口添によつて入隊した瀧山瀧人と眞田二郎は、町家の妻と密通したために詰腹。七番隊長の谷三十郎は四月に死し、蛤門以來勇名を馳せてゐた柔道の松原忠司も、谷の死に纏いて謎の自刃を遂げた。やはり創立以來からの川島勝司は、伍長まで勤めたが、隊名冒用で斷首された。

僅か半年の間にでも、これだけの人命が失はれてゐる。處斷となれば、過去の功績も情實も何もなかつた。近藤も土方も、人として考へられない假借なき冷酷味を持つてゐる。まるで隊規の人格化されたやうな存在だ。

淺野はこの半年を振り返つて、身の危險を感じながらも、酒井の場合や菅谷の山南敬助を思ふと、迂濶に脱走も出來ないと脅えた。あれ以來、誰一人淺野に言葉を掛ける者はなかつた。それは彼の臆病が傳はつたためといふよりも、彼の處斷が近きにあり、矢鱈に接近する危險を顧慮してゐるのは明らかであつた。

淺野はよつたく孤影悄然としてゐた。待たれるのは名古屋へ行つた伊東の歸營あるのみ。伊東は常に隊士の處刑に對する止め役だつたので、伊東に縋り、伊東に相談する他はなかつたのであらう。

かういふ淺野に、土方の蛇のやうな眼が光らない筈はなかつた。

「山崎君、どうだ淺野の様子は。」

「悄氣てをりますな。脱走するかも知れません。」

「誰か特に親しくしてをる様子はないか。」

「誰も相手にしないようです。」

「どうだ、薩邸へ行く様子はないか。」

「それ程の度胸はありますまい。」

「判らんぞ。隊で首尾が惡くなると、誰も彼も薩邸に色眼を使ひをる。」

「淺野よりも武田觀柳の薩邸出入りが、大分はげしいようです。」

「さうか。奴はおべつか野郎だから、何を喋るか判つたものでない。よし、淺野よりも武田が先だ。伊東が歸つて來ると面倒だから、留守の中に始末してしまはう。」

土方と山崎は連立つて近藤の居間へ出掛けた。近藤は相變らず習字に熱中してゐた。

「相變らずですな。」

「どうだ土方君、なかなかの上達だらう。」

「御熱心ですからな。……ちよつと御相談があります。」
土方は近藤の二人の小姓を遠ざけた。
「何だ。」
「局長は大分御信用でしたが、愈々武田がいけません。伊東さんが歸つて來ない中に、やつてしまはうと思ふんですが。……」
近藤は山崎を見た。
「證據を押へたか。」
「僕が突止めただけでも、薩邸へは三度目です。」
「さうか、止むを得ん。」
それが辯のぐいと口を一文字に曲げて、腕を拱いた近藤はきつぱりといつた。
「それにしても幹を切らないことには、隊士を失ふばかりだと思ふんですが。」
決意を促すやうに、土方は近藤の眼を瞶めた。近藤は默つて見返した。
「武田が薩邸入りをはじめたのは、廣島から歸つて以來です。局長や僕に對するおべつかも、あれ以來益々激しくなりました。どうも僕には伊東さんの、廣島以來の行動は腑に落ちん。武田も伊東さんに感化されて、薩邸入りをはじめたといふ氣がする。武田ばかりではなく、他にも巧みに隊の眼を掠めて、薩邸へ行く者があるらしい。とすると、これは薩邸入りをする者一人々々を狙ふよりも、幹を倒すことの方が、先決問題ではないかと思はれるのですが……。」
近藤は急所を衝かれたやうに、深い頷きを見せた。
「僕も氣がついてゐないわけではない。土方君、改めて僕は君に詫びなければならんが。僕は自己の無學を補ふために、また延いては武邊に偏つた隊に、文武を確立して整備し、新選組の存在を重からしめたいと考へて伊東を迎へた。しかし今日では、それが一方の破綻を招いてしまつたのだ。伊東の勤王論は、結局薩長の倒幕論と結びつくものだつた。今度の名古屋出張も、親藩の尾州侯の、會議出席を懇請するといふ口實だが、事實は長藩の、赦免斡旋の依頼に行つたのだといふことは、僕にも解つてをる。二度の藝州入りにも、僕は長藩の內情偵察に夢中になつてをつたが、伊東はどうやら、まるで違つたことをやつてをつたらしい。それが解つてゐながら、伊東には手出しがならないのだ。」
「なぜ手出しがなりません。伊東を斃さなければ、隊は人を失ふばかりではありませんか。」
「伊東の持つてをる人望が、どの範圍に及んでをるか君には判るか。芹澤の場合とは違ふ。芹澤の

場合は、むしろ我れわれの方に人望があつた。しかし伊東に今手を附けることは、どんな結果を惹き起すか知れない。篠原、服部以下の伊東一黨は、豫め警戒するとしても、隊中の誰が伊東の運動と結んでをるか。結んでゐない者の中にも、伊東に心服してをる者がどれ程あるか。この限界が明瞭にならない限りは、迂濶な眞似は出來ないのだ。不味く行けば隊は崩壞に頻する。それかといつて、このまゝの狀態を續けて行けないのは勿論だ。當分は靜觀して、時期を待つより仕方があるまい。引離せば敵味方になるかも知れんが、隊にをる間は、伊東一派も新選組としての行動を取る。それにいま伊東を失ふことは、外部に對する信用にも關するからな。これは矛盾でもあるし、隊の危機でもあるが、しかし機會が來るまでは、爆發させるわけには行かぬ。かうなつたのも結局は、時々刻々變化して行く時勢が、新選組にも反映してゐるのだと、僕は考へる。これを如何にして切抜けて行くかは、時勢が新選組に加へてゐる試錬だ。」

「敵は、外だけではないといふわけですな。」

土方も溜息を洩した。

「さうだ。所屬によつて、敵味方が決るのではない。例へば土佐の如き、藩公は親幕だが、下士は倒幕派だ。どこでもこの矛盾を持つてをる。敵か味方かは、心の中でしか見分けることが出來ないのだ。」

「明らかに解つてゐながら、手がつけられないのは殘念ですな。――武田はどうします。」

「證據を押へたものを、見脫す必要はあるまい。」

「では別宴でも開いてやりますかな。――山崎君、あちらへ酒宴の支度をして、幹部の者を集めておいてくれたまへ。それから、齋藤君をちよつとこゝへ呼んで貰ひたい。」

山崎が承知して出て行くと、暫く經つて局中第一流の使ひ手、劍道師範の齋藤一が這入つて來た。

× × ×

酒宴は夕方から始まつたが、日脚の速い秋の日は瞬く間に暮れて、座敷には百匁蠟燭の火が赤々と燃えてゐた。幹部連中は何の酒宴とも判らず、女氣のない豪飲を續けてゐたが、たうとう一杯機嫌の永倉が、近藤に訊ねた。

「局長、今日は何のお振舞ですな。」

近藤は默つて笑つてゐたが、近藤と並んでゐる土方が、冷たい笑ひを浮べて武田觀柳をじろりと見た。

「今日は武田君のために開いた送別宴だ。これまで長らく同志として、共に暮らして來た武田君が、愈々隊を脱退して薩邸へ還入られることになつた。そこでかくは一夕惜別の宴を張つたわけだ。諸君も大いに武田君の前途を祝して、過して頂きたい。」

武田はぎよッとしたらしかつた。顔が土色になつて、蠟燭の灯に狼狽と恐怖が明らかに讀まれた。一同さてはといふ顔をした。

「それは知らなかつたな。武田君おめでたう。」

皮肉に笑ひながらいつたのは永倉であつた。が、武田はそれに應酬する餘裕もなく、正面の近藤と土方に向つて問はず語りの自白を始めた。

「局長も副長も、とんでもない誤解をしてをられる。成程僕は薩邸へ一二度行つたことはあります。しかしそれは手蔓を得たのを幸ひ、内情を探索するためで、隊を脱するといふやうな考へは毛頭。……」

「武田君」土方は冷然と遮つた。「役目以外の君の勞は多としてをるよ。しかし探索の入邸には、相手に氣を許させるためにも、脱退といふことにして行かれた方がよろしからうと思ふんだ。とにかく敵地へ乗込むやうなもんだから、生還は期し難い。まア別れにひとつ行かう。」

土方はにやにや笑ひながら盃をさした。それをまた面白がつて、原田や齋藤が取次いだ。

「それから武田君、近頃隊士の中にも、ぼちぼち薩邸へ出入する者があるといふ噂だが、君が行かれたら、この點もよく注意して報告して貰ひたい。」

始終微笑を含んでゐた近藤が、中腰に立上つた。

「では武田君、これでお名殘だ。餘り遲くならない中に行くがいゝ。齋藤君、夜道で物騒だから、御苦勞だが伏見の薩邸まで送つてくれたまへ。」

見送り役が、飲めば人を斬りたがる劍道師範の三番隊長齋藤一と聞いては、武田は膝頭を顫はせながら動けなかつた。

「武田君行かう。君は行きつきりだが、僕は歸りがあるんだぜ。起てよ、何をしてるんだ。僕は送り狼ぢやないぜ。」

たうとう齋藤に促がされて、武田はすごすごと出て行つた。

「狼とはうまいことをいひよつた。はゝゝ」

永倉が笑ひ出すと、一同も聲を合せて大笑した。

翌朝竹田村の本街道の手前、錢取橋の際に、武田觀柳齋の死體は、前夜の時雨に濡れてゐた。

四

伊東甲子太郎と篠原泰之進は名古屋から歸ると、鈴木三樹三郎から不在中の出來事を聞いて眉を顰めた。

「人獸の沙汰だ。外に向つては志士を斬り、內に對しては昨日までの同志を弄殺する。伊東さん、もう新選組は見切り時ですぞ」と篠原は激昂した。

伊東も肯いた。

「さうだな。僕は機會ある毎に近藤を說いたが、良くいへば生一本、惡くいへば頑迷から、一途に薩長を敵視するの餘り、大勢も勤王の本義も悟らん。それでゐて、佐幕を自覺してをればまだしも、勤王論者を以て自認してをるんだから、始末が惡い。まごまごしてゐる中には、薩邸出入を押へられて、同志は次々に處斷されてしまふかも知れたい。或は旣に我れわれを狙つてをるかも知れん。」

「我れわれはもはや、一近藤や一新選組を、相手にしてゐる場合ではありますまい。今夜にも脫退を持出しませう。諸かなければ喧嘩別れだ。次第によつては、天下の爲に近藤土方を斬捨てくれる。なア鈴木君、どうだ。」

「よからう。兄上、脫退を持出しませう」と三樹三郎も應じた。

「まア荒立てる必要はあるまい。我れわれには回天の事業がある。王政復古を見るまでは、大切な命だ。輕擧は愼まなければならぬ。まづ穩かに、脫退を持出して見よう。ところで今日は、局長も土方もをらんようではないか。」

「晝過ぎから、醒ケ井の妾宅へ出かけたさうです」と鈴木がいつた。

「さうか、それなら丁度好都合だ。本營で話を荒立てるより、妾宅の方がいゝ。三樹、お前は服部、佐野その他の連中に、今夜脫退を持出すといふことを、そつと含めておいてくれ。尤も結果が判るまでは、妄りに輕擧のないようにとな。日が暮れたら、わしと篠原君で出掛ける。」

近藤が、七條醒ケ井の木津屋橋附近に在る、佛光寺の下屋敷に最初圍つた女は、島原木津屋の抱へで深雪太夫といふのであつたが、木津屋から直接に受出しては、局中の取沙汰が五月蠅いので、相談づくで一旦大坂新町の織屋へ住替させ、八軒家の新選組用達、京屋忠兵衞の手を通じて、あらためて醒ケ井へ圍つたのであつた。

深雪太夫の妹でお幸といふのが、曾根崎新地で幸公をしてゐたが、これも京屋忠兵衞の手で引

取ると、姉妹一緒に置いてあつた。ところが姉が不在の時、酒の上から近藤は妹のお幸に手を出した。姉はこの關係を知つて、きつぱり近藤を締め、妹に妾宅ぐるみ讓り渡して、自分は近藤の出資で島原に茶屋を出した。現在佛光寺下屋敷の妾宅に住んでゐるのは、このお幸であつた。

お幸は姉の深雪太夫に劣らぬ美人で、今年十九歳になつてゐた。近藤は三本木の駒野の家へは、土方さへ伴はなかつたが、この醒ケ井の妾宅では客にも會ひ、隊の者が遊びに來るのも拒まず、寛げる自宅のやうにしてゐた。

日が暮れると、伊東と篠原は近藤の妾宅へ出掛けて行つた。寺の下屋敷とて間數も多く、玄關庭園等、妾宅といふよりも、新選組局長の自宅といふに似つかはしかつた。

伊東と篠原は、下女に通じて奥座敷へ通ると、お幸を傍に近藤と土方は酒宴最中であつた。

「おゝ、よいところへ來られた。いつお歸りでしたな」と近藤はすぐ盃をさした。

「今日晝過ぎに歸營しました。」

土方も篠原に盃をさした。その中に膳が運ばれて、伊東は近藤と、篠原は土方と向ひ合ひ、お幸が酌をして廻つた。

「如何でした。尾張中納言の出馬は」と近藤が伊東に訊いた。

「樣々に懇請して見ましたが、この度は御支障で、何としても御上洛は困難な趣きでした。殘念ですが仕方がありますまい。」

「伊東さんよりも、會議に尾張中納言の缺けることは、長州が殘念がるだらう。」

土方が皮肉にいつた。例の冷たい感じの笑ひを浮べてゐたが、伊東と篠原の顏を見た瞬間から、むづむづしてゐたらしかつた。

むづむづしてゐたのは篠原も同樣であつた。彼はいきなり土方に喰つてかゝつた。

「何だ、それは皮肉か。」

「皮肉に取れるだらう。何もわざ〳〵長藩贔屓の尾張中納言を、勸誘に出向くことはあるまいと思ふのだ。」

「さうか、我れわれの行動が氣に入らなければ、我れわれはいつでも脫退するぞ。」

「なに、脫退する。」

「さうだ。今夜はそれを話しに來たんだ。我れわれの不在中に武田を弄殺したり、三條磧で志士を斬つたりして、褒美を貰つて得意になつてをるといふではないか。さういふことは、我れわれの主義と相容れんのだ。」

「武田は薩邸へ出入りして、隊の機密を洩らしてをるから處刑したんだ。何が惡い。」
「處刑なら處刑でよい。相手も武士だ、立派に切腹の座を與へてやればよいではないか。何も昨日まで苦樂を俱にし、殊に兵學者として、多少とも隊には功勞のあつた人間を、嬲りものにして殺すことはなからう。局長は斬りさへすれば氣の濟む人だが、別宴なんぞ開いた慘忍な眞似は、おほかた君の細工だらう。三條出張にしてもさうだ。元は三年越しにもなる立腐れの制札を、拔棄てただけのことではないか。奉行所が躍起になつて新調なんぞするから、あんなことになるんだ。そんな兒戯に類することに、隊の者がのこの出掛けて行つて、何の面目がある。」
「守護職の命令だ。」
「つまらぬ命令は、斷はればよいではないか。奉行所が勝手に意地張つてをるんだから、その手で勝手に警戒すればよいのだ。守護職の命でありさへすれば、易々諾々と動くから、新選組は人を斬る以外に能がないと笑はれるんだ。」
「誰が笑つてをる。君は新選組を罵るのか。」
「篠原君、喧嘩をしに來たんぢやない。君は暫く控へてゐたまへ。」
伊東も近藤も默つて二人の爭ひを聞いてゐたが、伊東がはじめて篠原を制止した。
「土方君、君も默つてゐたまへ」と近藤も眼で土方を押へた。
「伊東さん、脫退といふのは篠原君だけの意志ですか。あんたも同意見ですか。」
「僕も同意見です。我れわれ以外にも、多數希望者がある筈です。」
「誰々です。名を擧げて貰ひませう」と土方がいつた。
「唯今は申上げられない。」
「なぜです。」
「希望者であつて、申込者ではないからです。」
伊東は土方には取合はずに、近藤の方へ向き直つた。
「近藤さん、理由の如何を問はず、我れわれの脫退を、無條件に承認してくれますか。」
「隊規は脫退を認めません。强いて脫退なされば、隊としては處罰しなければならない。それでは穩當を缺くから、理由を伺つた上、已むを得なければ、最善の方法を講ずべきだと思ふが、あんたもやはり制札事件と、武田の處刑が不滿だといはれるのですか。」
「苛酷な隊士の處刑は、僕の望むところではありません。が、內部の問題は別として、制札事件に見られるやうな、新選組の行動は僕の潔しとしないところだし、さういふ新選組の任務、汎くは

浪士狩に藉口して、勤王運動に壊粋する志士を逮捕したり、斬殺したりすることは、僕の主義に一致しない。新選組が今後もこの方針を續ける以上は、僕達は袂を分つ他はないのです。」

「あんたの主義と仰しやると。」

「王政復古を目指す勤王郎倒幕です。」

「以前にもさういふお話があつた。僕も勤王論者だ。僕乃至新選組の任務は、勤王の事に反すると思はない。新選組が浪士を壓迫するのは、洛中の治安を紊るからのことであつて、薩長主義を取締つてをるのだ。あんたは薩長主義と、勤王主義を取違へてをられるのではないか。幕府を倒さなくとも勤王の事には盡せる。」

伊東は笑つた。

「近藤さん、あんたはなぜそのやうに幕府を擁護なさる。」

「幕府に同情するからです。幕府はひたすら叡慮に添ひ奉らうとして、難局に當つてをる。薩長は政機を掌握しようといふ野心のみによつて、勤王に藉口し、倒幕を企圖してをるのだ。幕府こそ忠臣だ。幕府には何の罪もない。あんたから倒幕説を聞かうとは實に意外だ。」

「近藤さん、あんたは勤王論を誤つて、佐幕説を固持してをられる。いつも申上げる通り、勤王論は根本に於て、幕府なるものゝ存立を認めない。我が國體は主上を頂いて、政令一途に出づべき筈のものであり、朝廷の他に、政權の府が存在する變則を認めないのです。幕府はこの變則の維持と威信保持に汲々としてをる。近頃に至つて多少とも、叡慮に順應の樣子を見せるに至つたのは、大勢に制肘せられて已むを得ざるに出でたのであるが、それさへ至誠から出たのではなく、威權失墜に狼狽して、非難を避け安全を期さうとの手段に過ぎない。こゝに至つてもまだ、變則の維持に政策を傾注してをる。幕府に罪はないといはれるが、罪が目立たなかつたのは、朝廷の干渉がなかつた間だけだ。外敵の出現によつて、朝廷の意見が表面に現はれて來ると、幕府の政策、幕府の存在が、如何に朝廷を蔑如し奉つてをつたかゞ、俄然白日の下に曝されるに至つた。さればこそ、國論が沸騰して來たのです。然るに二百年來の、變則泰平の夢は尚醒めず、最近に至るまで、幕府の罪科は擧げて數ふるに遑がない程だ。阿部閣老の、朝廷に對する神奈川條約の、事後承諾を奏請したるが如き、堀田閣老の、無斷開港條約の起草の如き、また井伊大老の、勅許をも待たでなした安政條約調印の如き、これ天朝を輕んじ奉るの罪にあらずして何であらう。かくして宸襟を惱まし奉り、國論鼎沸して拾收困難となるや、武斷政策の暴虐を以て戊午の大獄を起し、朝廷を威嚇し卒つて、至誠勤王の士を捕へ、その後大老の政策を踏襲せる安藤閣老は、公武間の融和を策し、

世論の鎮静を圖るに、皇妹御降嫁を懇請するの僭上に出でた。しかも將軍は、皇妹御降下によつて直ちに上洛し、聖恩を謝し奉るべき御約束を奏上しておきながら、典禮後も敢てその擧に出でなかつたではないか。天朝を欺罔し奉り、皇室を輕侮し奉るの大罪、萬死に價するものだ。天朝欺罔の一事を以てしても、幕府の罪は討滅に價する。しかもこれ等は、外艦渡航に端を發して曝露された、こゝ數年來の罪狀に過ぎない。幕府直轄の領地を、天領と僭稱してゐる事實や、代々の主上の御陵の御質素なると、日光東照宮の華美絢爛なるとを比較して見ても、思ひなかばに過ぎるではないか。過去二百年來、德川幕府は朝權を侵し、あまつさへ朝廷の式微を顧みることなく、獨り朝權を私して、贅の限りを盡してをつた大賊だといへよう。近藤さん、あんたの幕府への同情は、變則への同情です。幕府を佐けて、勤王論の成立たないことがお解りになりませんか。」

めづらしく伊東の言葉は熱し、眼は熱情に燃えて、美男劍士の名を得たその端正な顏は、紅潮を呈してゐた。近藤は、筋肉が凝固したやうな緊張を見せてゐた。

「幕府にそれ程の罪科があるとすれば、なぜ朝廷は幕府から、政權をお取上げにならぬ。なぜその幕府を御信任になり、政治を御委任になつてをる。なぜまた長藩をお咎めになり、勤王浪士の取締に任じてをる新選組を、御嘉賞になる。朝廷にお仕へ申し、朝廷の御嘉賞に預る新選組が、なぜ勤王に反するのか、それをお伺ひしたい。」

「成程、新選組の今日當面してをる立場は、御嘉賞に價する行動に見える。しかし大勢に抗してをる點では、如何に大きな罪を犯しつゝあるか。問題は昨日の御嘉賞、今日の取締といふ、些々たる日常にあるのではない。長藩のお咎めも、浪士の暴發も、事志と反する一時の瑕瑾に過ぎない。一時は焦燥から朝譴を蒙り、不逞暴徒の名を蒙ることがあらうとも、勤王藩、勤王浪士は、その彼方に新らしい御代を臨んでをる。卽ち王政復古の御代、變則を除いた天朝の御代だ。これが勤王論者によつて、實現した時の御嘉賞を思へば、今日幕權の介在によつて、一時樣々な汚名を負ふことくらゐ、勤王論者にとつては何でもない。このために多くの志士は、生命を拋つてをる。死の意義を識つてをる彼等に取つて、およそ危險といふものはないのだ。それが理想へ近づくことなら、如何なることも直ちに實行する。局長は武力によつて、彼等を掃滅出來るものと信じてをられるし、それを期してをられるが、絶對に不可能です。一人を殺して十人の志士を作る。新選組はそれをやつてをる。吉田松陰は江戸に護送されるや、自ら進んで死罪事項を自白し、從容刑死したではないか。なぜ松陰が、助かるべかりし命を助からうとしなかつたか、近藤さんお解りになりますか。松陰は自分の死に期待した。「有志の士一人の鮮血は、軈て萬人の志士を釀成する。」これが松陰の信念

であつた。松陰はおのれの死が、理想を一歩速めることを知つてをつた。これが誤りでなかつたことは、戊午の大獄に奮起した志士や、その後の情勢によつてお解りになると思ふ。更に櫻田門の井伊大老の死は、反對派の大立物の死であつたが、この反對派の死さへ志士を振興させた。さればこそ、大老の政策を踏襲した安藤閣老が、坂下門に要擊を受ける結果となつた。同志の死にも、反對派の死にも、志士の奮起が促される。これを以て見ても、大勢の赴くところ、志士掃滅の不可能なことは、お解りになると思ふ。不肖伊東と雖も、死の意義を知る者の一人です。脱退の認められぬことを知つて、脱退を申出た。それだけでも充分危險である。これを敢てするのは、理想に抗する役割を避けんがためです。近藤さん、朝廷が幕府を御親任になるのは、已むを得ざるによるのです。政權をお取上げにならぬのは、朝廷に親兵がおありなさらぬがためです。かゝる時局多事の時、親兵なくして御親政は行へません。そこで王政復古に際して、親衛たらうとしてゐるのが薩長です。薩長主義といはれたが、薩長主義は勤王の本道を行くものだ。この大勢を理解して新選組の歸趨を定めない限り、僕達は袖を連ねてゐるわけには行かない。あんたの方に於ても、從來の態度を變へないとすれば、かうして立場を明らかにした僕達を、局中に留めておくことはお望みではありますまい。」

「ではお訊ねするが、假に新選組があんたの說を容れて、幕府、卽ち守護職との關係を絕つとすれば、何に屬しますか。洛中に隊としての獨立は許されますまい。薩長へ趨ることは尙更不可能だし、道は唯一つだ一同隊を解散して、浪士となる他はないでせう。」

「いや、隊士の多くは國士を以て任じながら、勤王の精神を理解してゐない武邊一途の者です。それを個々に放置するのは、それこそ文字通り不逞化する惧れがある。飽くまで團體として隊則で縛つた上、徐々に大勢を自覺させなければなりません。そこで僕の案は、守護職の手を離れて、隊としての獨立を期するために、直接朝廷の衞士たらんことを奏へ願ひ出る。それが困難ならば、御陵衞士を志願する。そして徐ろに同志を養ひ、一朝有事の際に備へたいと思ふのです。」

それは四年前、清河の策したところと同樣であつた。近藤はふと異樣な思ひに打たれながら、重ねて訊ねた。

「隊があんた方の脱退を認めた場合も、さうなさるか。」

「これは脱退後の、我れわれの旣定方針です。」

これを聞くと近藤は、俄かに愁眉を開いた。

「よろしい伊東さん、あんた方の脱退を認めよう。しかし、これには條件がある。僕は薩長の態度

には、あんたと見解を異にする。從つてあんたの說を、鵜呑みに容認するわけには行かぬ。薩長が時を得て廟堂に覇を唱へ、眞に勤王の實を擧げるか。幕府が眞に朝廷の親衞となつて局面を打開し、朝廷のために全國統一の實を擧げるかは、將來のことに屬する。僕は今日の事態を重視して、尙暫く新選組を率る、輦下の治安に任ずる。しかしこゝで新選組の內紛を見せることは、外に對して信用を失墜し、內に對して綱紀を弛緩し、士氣を沮喪する惧れがある。御承知の通り、僕は並ならずあんたを信賴してをつた。それだけにあんたとの衝突は困る。洛中潛伏とか、薩長屋敷に入るとかいふことになれば勢ひ双にまみえなければなるまいと、その點を憂慮してをつたが、今の方針を伺つて安心した。脫退といふ名目は困るが、分離といふことで認容しようではありませんか。任務は異るが、新選組の別働隊といふ名目になれば、內外に對して內紛を見せずに濟む。それから衞士の請願が聽許になるまでは、從前通り隊に留まり、それまでは局中に分離を發表しないといふ事にして頂きたい。この條件を御承知なら、止むを得ないことゝして、脫退を認めませう。」

「結構です。僕達は僕達の主義に於て去るのですから、新選組の面目を踏み躙つて行くのが、望みではありません。御意見に從ひませう。」

伊東は穩かにいつて篠原を顧みた。

「どうだ、それで結構ではないか。圓滿に分離することは何よりだ。」

「異存はありません。僕はもつと困難を豫想してをつたので、最初から喧嘩腰でやつて來たのだ。局長は案外話がお分りになりますな。はゝゝ」

篠原が豪放に笑ふと、四人ははじめて聲を擧げて笑つた。

「土方君も、そのつもりでゐて貰はんと困る。どうも僕より君の方が喧嘩好きらしいからな。」

近藤がかういふと、土方は苦笑して、「では篠原、仲直りに一杯行かう」と盃をさした。

お幸が吻として酌をした。間もなく伊東と篠原は本營へ歸つて行つた。

「いゝ機會だから、僕は叩ッ斬つてやらうと思つたが。……」

二人の退座を待兼ねてゐたやうに、土方がいつた。が、近藤はかぶりを振つた。

「時期を誤つては、取返しのつかぬ騷ぎになる。分離の人數を見るのだ。去る者は去らせた上で、策を構ずるのだ。」

近藤は苦さうに酒を含んで、土方を幸福な男だと思つた。土方を制するために口にした言葉は、近藤の心ではなかつた。彼の意識面には、久し振りに山南敬助と久坂玄瑞が泛び出てゐたのだ。死の意義。——有志の士一人の鮮血は、軈て萬人の志士を釀成する。……久坂もまたそれに徹して、

大勢の赴くところを見通し、理想の日の到來に自信を以て、悠々紅燈の影に憩ひ、戰塵の中を馳驅し、而しておのれの一切を、死の意義に委ねてゐたのであらうか。今日も尙未知數に屬する彼の理想の日の到來が、絶對であるとした彼の信念は、果してどこから來てゐるのであらう。恰も久坂玄瑞の姿は、雨を孕み雷を潜め、しかも遙かに山肌を遊弋する、悠揚たる雲を見るが如くに近藤には思はれた。

久坂だけは生かしておきたかつた。おれは不思議に心に懸るこの男と同じ間生きて、久坂が正しかつたか、おれが正しかつたかを較べて見たかつた。――）

現在の自分は、未だ誤つてはゐないと固く信じてゐながら、近藤は完全に伊東に說き伏せられたおのれを、感じないではゐられなかつた。

× × ×

慶應二年十二月二十五日、孝明天皇は寶算三十六の御壯年を以て崩御ましまし、世は諒闇となつた。この月十三日より御不豫に在しましたが、御病狀次第に重らせられ、內外多難の時運に御宸慮を惱ませられながら、遂に崩御ましましたのであつた。

朝權の御回復に御心を用ゐさせられ、皇威を增させ給ふた御尊德は大であつたが、一面深く幕府に御仁慈を垂れ給ひ、歷史ある立場に御同情を濃がせられたことは、衰遲にあつた幕府の感佩銘記すべきところであらう。今や幕府は最後の支柱を失つたに等しかつた。

これより幾、十二月五日、一橋慶喜は、二條城に於て十五代將軍を宣下、正二位權大納言征夷大將軍に任ぜられた。

明けて慶應三年正月九日、明治天皇は御年十五歲を以て御踐祚の式を擧げさせられた。從來御親任厚かつた新將軍慶喜も、守護職松平肥後守容保も、まつたく勝手の遇つた狀態に置かれることになつた。征長慘敗、將軍薨去、天皇崩御――。幕府は今や暗礁の間を彷徨する老朽船のそれであつた。

三月十日、豫て泉涌寺の塔頭戒光寺の長老滋然の斡旋に依賴してゐた伊東、篠原等の一黨は、志願が叶へられて傳奏を經、孝明天皇の御陵衞士を拜命することが叶つて、山陵奉行戸田大和守忠至の支配に屬した。欣躍した伊東等は命を拜した翌十一日、新選組の本營を去つて、一時五條通の善立寺に移ることゝなつた。

その前夜本營では總員大廣間に集合して、盛な送別の宴が開かれ、伊東は起つて、分離別働隊たらむとする一場の挨拶を述べた。續いて近藤勇は送別激勵の辭を述べ、この分離が伊東等との袂別

にあらざることを説明し、特に新選組が至誠奉公の誠を盡して、益々聳下の治安取締を嚴に行ふと同時に、別働隊の御陵に謹仕するを以て、勤王の誠を致す所以を力説した。

「かような次第であるから、この際局中に於て、御陵衛士を志願したい者があれば、身分の如何にかゝはらず、遠慮なく今宵の中に伊東參謀の許へ申出て頂きたい。參謀の承認を經て、申達された者には、參加を許下する方針である。」

最後に一座を見廻してから近藤はいひ添へた。

翌朝、近藤の手許へ差出された分離派の連名は、左の十六名であつた。

參謀伊東甲子太郎、七番隊長鈴木三樹三郎、監察篠原泰之進、同新井忠雄、同服部武雄、同毛内有之進、伍長加納鵜雄、同富山彌兵衛、同中西昇、同橋本皆助、平隊士内海二郎、同佐原太郎、砲術師範阿部十郎、同清原清、三番隊長齋藤一、八番隊長藤堂平助。

近藤、土方を始め、幹部連中は集つてこの連名を見たが、さすがに感慨なきを得なかつた。試衛館派と山崎だけは分離の裏面を知つてゐた。近藤の四天王といはれた中の山南は既に亡く、今また藤堂去つて、沖田、永倉を餘すのみとなつた。

藤堂、齋藤二人の參加は、如何にしても不思議であつた。しかし不思議といへば、當然伊東の腹心と見られた佐野七五三之助、茨木司、富永十郎、中村五郎の四人が加入してゐないのは、藤堂、齋藤が加入してゐる事實と同樣、更に不思議に思はれた。

近藤は尙も連名を見ながら、劍道師範の新井忠雄、新井と共に制札事件で功勞のあつた橋本皆助、砲術師範の阿部、清原――と、元から伊東一黨でなく、むしろ新選組としては、期待するところ多かつた者の名を拾つて、脇の下に冷たい風の忍び込む思ひを覺えた。

淺野薫は當然參加してゐるべき筈であるが、實はこの時既に世に亡なかつた。淺野は伊東が名古屋から歸るとすぐ、事情を打明けて身の振り方を相談した。危險はかなり切迫してゐる樣子なので餘義なく伊東は分離の計畫を話し、一時身を潜めてゐるようにといつて脫走させた。が、間もなく沖田のために發見せられ、葛野郡先勝寺村へ引張り出されて、川中へ斬込まれてしまつた。それは去年十月末のことであつた。

午まへ、諸道具を車に積み終へて、武器を携へた伊東以下十六名は、別れを告げて元氣に本營を出て行つた。陽春三月なかば、和やかな彌生の陽は音もなく地に陽炎を燃やし、本營の庭にも櫻が咲き誇つてゐた。出て行く者の胸には、春らしい希望と感激が燃えてゐた。が、見送る者の心に殘る落莫の思ひは、如何ともすることが出來なかつた。

「見ろ山南、この通り機會は訪れた。新選組にも秋が來たよ。來る春ごとに秋が深まる。皮肉ではないか。……」

藤堂平助は、心の裡に亡き山南を呼びながら、明暗の本營門を踏み出した。

大政奉還

一

英米佛蘭の四ケ國に約した兵庫開港期限は、愈々今年一杯となつた。慶喜は新將軍として初の謁見をした時、四ケ國公使から既に念を押されてゐた。そこで三月五日、書を朝廷に上つて、縷々海宇の形勢と、開港の已むを得ざる事情を奏して、勅許あらせられむことを乞ふた。

この結果は、當時政界の大立物たる薩州の島津久光、宇和島の伊達宗城、土佐の山内容堂、越前の松平春嶽の四侯が召されることになつた。前年二十四侯の多數を召集して集まらず、諸侯會議が流產に終つたのに鑑みた結果であつた。

四藩會議で慶喜が解決を急いだのは、開港問題であつたが、久光を主とする四藩は、國内統一を先決問題として、開港に先立ち、長州處分の寛大解決を要求した。稜々對立して相讓らず、會議は危機に頻したが、慶喜は兩事並行の折衷策を樹てゝ、この旨を奏請した。四藩の二事並行不可論と、朝議の動搖があつたが、慶喜は例の彼一流の、一身引責論を以て強引に押切り、遂に五月二十四日「長州處分は寛大にする事、兵庫開港の事は、餘儀なき時勢に就き差許す」との勅諚を拜するに至つた。

この間、分離派の御陵衛士等は、四方に遊說して同志を募り、諸國の勤王志士等と交りを深めてゐた。三條以下の諸卿が謫せられてゐる太宰府は、薩、長、土の志士の往來する策源地であつたが、伊東は新井忠雄と、共に中國を經て九州へ渡り、太宰府に至つて諸藩の志士等に京都の近況を傳へ、王政復古の實現に力を致すことを誓つた。清原清、加納鵬雄は伊勢路へ發ち、中西昇は近江路へ、富山弼兵衛は但州へと向つた。

六月、伊東等の歸洛と共に、彼等は五條の善立寺から、東山高臺寺内の月眞院へ移つた。高臺寺は近い左右に、祇園の櫻と八坂塔を控へた歴史ある寺で、往時太閤秀吉の室北政所が居所であつた。

文久三年松平春嶽の宿營となつて、浪士の襲撃を受け火をかけられたが、それでも臨濟宗の巨刹としてよりは、遠州流の雅致ある林泉を持つことと、萩の名所で市民に親しまれてゐた。

殺伐で血腥い新選組の本營から、この閑寂の地へ移つた衛士達は、恰も聖地這入りでもしたやうな清爽の氣を感じ、自ら心身の更るのを覺えた。彼等は新選組を憐れんだ。彼等ばかりではない。世人もまた彼等を、分離當初の聲明通り、新選組の別働隊とは考へず、彼等を稱ぶに獨立した高臺寺黨の名を以てした。

六月十二日の夕、鈴木、篠原、新井、服部、藤堂、齋藤のこゝでの幹部達は、暮れぬ中に行水と夕食を濟ました後、伊東の居間の前へ集つて、縁に掛けたり、歩き廻つたりしながら話してゐた。

「こゝは涼しくて結構だが、かう蚊が多くては仕方がない。縞になつた蜻蛉みたいな奴が、着物越しにちくりちくりとくるんだから耐つたものではないよ。」

鈴木三樹三郎は頻りに足許をばたつかせて、縁側の蚊燻しに蚊遣木を繼ぎながらこぼした。「我慢しろ、暑い間だけだ。不動堂村で蒸されてゐることを思へば、こゝは別莊みたいなもんだ。來月末には萩が咲く。萩の名所で月見をさせるよ」と篠原が笑つてからかつた。

「御芳志は忝けないが、さう聞いても掻ゆいのは止まらん。どうだ、祇園へでも出掛けて見ないか。兄上どうです。」

「蚊に逐はれて祇園入りか。それでは夏中入浸つてゐなければなるまい。わしは行かんよ。」

伊東は居間の机に凭つたまゝで笑つてゐた。

「兄上は話せんからな。諸君はどうだ。」

「涼みがてら、出かけるかな。」

鈴木に誘はれて篠原、新井、服部はぞろ〳〵立上つた。

「何だ、篠原も行くのか」と藤堂が笑つた。

「それとこれとは別だからな。君も齋藤もどうだ。」

「僕は止さう。」

「おれも止すよ。」

「さうだ」と伊東がいつた。「藤堂君と齋藤君とは、特に不動堂村に怨まれてをるから、餘り出歩かない方がいゝ。三樹、氣をつけて行けよ。」

一同は出て行つた。それを見送つて藤堂が、獨り言のやうに呟いた。

「分離してからは暢氣だな。久し振りに人間を取返したやうな氣がする。」

「帳家なのも暫くだ。情勢は刻々に迫つてをる。四藩會議で長藩處分の先決を主張した島津の老公が、將軍に出し抜かれて酷く感情を害してをられるし、この正月幽閉を解かれた岩倉卿が、有力な王政復古論者になつて、太宰府の三條卿等と結んでをられる。雄藩の方では藝州藩が動き出して薩長に接近の色を見せてゐる。準備はすつかり出來てをるのだ。これで安政五年の水藩への密勅のやうに、討幕の密勅を拜することに成功してみたまへ。一擧に幕府を屠つて、回天の日を仰ぐことが出來るんだ。今の中に存分英氣を養つておくんだな。」

伊東の言葉は希望に燃えてゐた。

「岩倉卿と三條卿といへば、犬猿の間柄ではなかつたのですか」と齋藤が訊いた。

「さうだ。しかし一應公武一和の策を構じて、徐ろに倒幕を圖らうといふ深謀が、以前から岩倉卿の御心中にあつたのだ。今日王政復古論者になられたのは、諸情勢の既に熟したことを、見て取られたからだ。なかなかの傑物だよ。卿と三條卿等の間を周旋したのは、土州の中岡慎太郎だ。聞いてをるだらう。石川誠之助といつてをる男。薩長の密約には、同じ土州の坂本龍馬が立會つたといふが、この中岡が坂本と一緒に、容易ならん斡旋の勞を拂つてをる。なかなかの偉才だ。」

「かういふ情勢が、どうして近藤さんに理解できないのか。僕は惜しい人物だと思ふが。……」

藤堂平助は慨嘆するやうに小首を傾げた。

伊東も大きく頷いた。

「まつたく土方と違つて、近藤は惜しい男だ。寡慾恬淡で性格も強く、生一本で果斷に富んでをる。惜しむらくは、教養に缺けた單純な武邊者であることだ。無學に生一本が作用して、大勢を理解することが出來ない。そのために、彼の持つてゐる善いものが、すべて惡用される結果となつてをる。あの男が特に隊規に嚴格なのは、自己を正しいと信じながら、その信念を理論づけることができないからだ。嚴格な隊規の遂行だけが、彼に正義と安心を與へて、自己の動搖を防ぐ唯一の據所になる。いや、思へば氣の毒な男だが、局長といふ地位を得たことが、彼の不幸の原因をなしてをるのだ。棟梁たるの素質はあるが、衆に將たるの素養がない。彼によき薫陶者があり、指命を受ける立場にあれば、この時勢に處して、充分立派な功績を擧げることが出來るのだが。……近藤は藝州の中村半次郎君に似てをる。西郷といふよき指導者を得て、時勢の正しさに處してゐるのが中村君であり、能力以上の地位に押上げられて、道を過つてゐるのが近藤勇の姿だ。」

「死んだ山南も、それをいつてをりました。近藤さんに向つて、よき教導さへあれば、あなたは立派に勤王至誠の臣になれる人だと。……山南を今日まで生かしておいてやりたかつた。居れば今夜

我れわれと一緒に、こゝで同じことを話してゐる筈だが。……」

藤堂は沁々と追懐深げにかういつた。

するとこの時、襖を開けて内海二郎が現れた。

「先生。不動堂村から佐野、茨木の兩君がやつてきました。」

「ほう、通してくれたまへ。」

伊東は愉快さうに答へた。

内海と入れ違ひに這入つて來た佐野七五三之助と茨木司とは、そこにゐる藤堂と齋藤を見ると、

「やア、暫くでした」と會釋した。

「どうしたんだ」と伊東が訊いた。

「いよいよ脱退して來ました。一昨十日、新選組の忠勤は、恩顧譜代の旗本にも優るといふので、幕府の恩命が下り、局長以下正式に幕臣に列しました。局長は御目見得以上の格で六百俵、大久保の姓を許され、副長は七十俵五人扶持。内藤姓を許された副長の如きは、天下を取つたやうに大滿悦です。」

「ほう、では愈々直參になつたか。大久保も内藤も、徳川家に由緒深い麾下の姓だからな。近藤はともかく、土方が有頂天になるのは無理もあるまい。」

「我れわれは發表があると同時に、不服を申立てました。我れわれが脱藩を敢てして、舊主の許を去つてをるのは、盡忠報國の志あるがためだ。今更幕臣に列して榮譽を蒙るくらゐなら、浪士となる必要はなかつた。二君に仕へては、舊主に對して面目が立たぬ。新選組一統が、幕臣たることを承認するならば、遺憾ながら我れわれとしては、脱退するの他はないとかう申立てると、副長は苦い顔をしてをりましたが、隊規に抵觸したわけではないので、如何にも處置に困つてをる樣子でした。豫て盟約してをつた中村五郎、富永十郎などと一緒に騒ぎ立てたものですから、局中は大分動搖して、町田克已、中村三弼、木幡勝之助、松本俊蔵、高野良右衛門、松本主税の六人が歩調を揃へて來て、この上は高臺寺へ行かうといふのです。それで長居は危險だと思ひ、今朝脱出して、我れわれ共に十人、堀川に宿をとつてをります。」

「それはお手柄だ。結束を亂して隊を動搖させておけば、今後もこつちへ來る者が出るだらう。來なくともよい。一人でも多く脱けさへすれば、幕府の一機關たる、新選組の勢力が減殺されるのだ。」

「それで、僕達がこの儘當寺へ移つては、新選組と紛議を釀して、將來のためによくないと思ひまして、明日會津邸へ揃つて行つて、正式に脱退の手續を了へた上、改めて來ることに相談を纏

めました」と、代つて茨木がいつた。

「結構だ。さうして公然と來ることにすれば、後の面倒がなくていゝ。しかし會津邸行には、充分注意したまへ。危險だと思つたら、直ぐ當寺へ駈込むことにして。——」

佐野等は暫く雑談をして、藤堂と齋藤に、追つけ仲間に加はりますよといひ殘すと、倉皇と歸つて行つた。——佐野等は新選組内部の攪亂と、間諜の役目を帶びて、今日まで不動寺村に留まつてゐた次第だが、伊東に左様な深謀のあつたことは、藤堂、齋藤さへ今夜話を聞くまでは知らなかつた。

しかも、その事情が齋藤によつて、早くもその夜の中に、七條醒ケ井の妾宅に在る近藤に報ぜられるに至つては、正に間諜戰の觀があつた。山崎蒸の如き名探偵を有する新選組が、最も間諜らしくない武邊者の齋藤一を、間諜に入れてゐたことは、さすがの伊東も氣付かなかつた。

佐野、茨木等の事のみならず、近藤は齋藤の報告によつて、政局の裏面を詳さに知つて、坂本、中岡等の策動までも知悉することが出來た。

當夜妾宅へ來て別間に泊り込んでゐた土方は、話を聞くと同時に腹を立てゝ、堀川の旅館を虱潰しに調上げた上、佐野等を叩斬らうといつた。が、近藤はなぜか土方の激昂を押へた。

齋藤一は夜明前に歸つて行つた。彼は佐野等の歸つた後、伊東に斷つて鈴木篠原等の後を追ひ、祇園で落合つて一緒に泊り込んだ。そして深夜秘かに醒ケ井へ駕籠を飛ばして、用談を濟ますと、素知らぬ顔で茶屋の一間に眠つてゐたのであつた。

近藤は會津邸と打合せを了したその翌々十四日、沖田、永倉、原田、井上の腹心に、大石鍬次郎を加へ、旨を含めて會津邸へ派遣した。試衛館生抜きの幹部が、斯様に揃つて出掛けることは近來稀れであつた。

「佐野をはじめ十人の奴等は、昨日會津邸へ申入れた脱退の返事を聞きに行つて、留守居役が不在だといふ口實で、待たされてをる筈だ。首謀者は佐野、茨木、中村、富永の四人。後の六人は別室に控へてをるだらうが、首謀者四人だけを方づけて貰へばよろしい。六人は單に、附和雷動したに過ぎぬのだから、そのまゝ連れて歸つて貰はう。しかし、四人をやることは、どこまでも局中へ洩れないように。——」

出がけに、近藤はかう申渡した。

沖田等は二三人宛に別れて、黄昏からぶらりと本營を出て行つた。

彼等の歸營は夜半になつた。そして豫定の如く、佐野、茨木、中村、富永等首謀者を除く後の六

名を連れて歸ると、一間へ檻禁してしまつた。

大石は、股に立てない程の負傷をして、門前まで駕籠で戻つたのであつた。

「どうしたんだ。大石」と不覺を意外とするやうに土方が訊いた。

「いや、飛んだ不覺でした。最初一間に待ちあぐんで、退屈し切つてをつた四人を外から槍で突伏せ、それから皆で斬つて廻つて、沖田さんなどが六人の居る方へ出て行かれたが、僕は一應確めておいた方がよからうと思つたもんですから、一人引返したのです。念のために、倒れてゐる四人の肩先を蹴つて見たが、三人とも動かない。それでちよつと油斷したために、四人目の佐野の奴がいきなり脇差を抜いて、この通り刺して來た。尤もそれが最後の力で、そのまゝ斃れてしまひましたが、どうも大失態で面目ない次第です。」

「念を入れて不覺をとつたといふ次第だな。」

話す方も聞く方も苦笑した。

翌日近藤は總員を廣間に召集して、次のやうに發表した。

「この度の幕府の恩命に不服を申立て、守護職へ脱退を願出た佐野以下の諸君は、會津侯の說諭によつて、一旦歸營を承知したのであるが、再び同志諸君に見えるのを不面目として、昨日、佐野、茨木、中村、富永の四君は、會津邸に於て見事な自刄を遂げました。その行爲は士道を誤らざる立派な態度で、洵に感服の他はない。就いては、四君の靈を慰めるに、隊葬を以ていたしたいと思ふ。なほ町田、中村三彌、木幡、松本俊藏、高野、松本主税の六君は、徒らに前四君に附和雷同した罪により、隊を除名するから左樣御承知願ひたい。」

そして佐野以下四名の葬儀は、前例のない程堂々たる隊葬を以て行はれた。

威よりも懷柔が必要となつた。處斷よりも策を行はねばならなくなつた。それ程に隊内の動搖防止を圖らねばならない原因を、近藤は新選組の衰運だとは思はず、また大勢の必然的な支配にあることを考へる前に、ひたすら高臺寺黨の存在あるがためだと思つた。

が、この時、伊東甲子太郎の出發に續き、幹部の大半が、また遊說の旅に出たといふ情報がもたらされた。

憤慨の遺場がなかつた土方は、隊士を指揮して市中の取締を厳にし、旅人改めは辛辣を極めて、藩籍不明の武士と見れば、有無をいはさず斬つて廻つた。顧みれば文久三年以來五星霜、元治元年の池田屋事件、長藩侵禁等のあつた頃を頂點として、私憤の遣り場に浪士狩の擧擧を行ふようになつた新選組もまた、幕運と同じ衰運に見舞はれたものといはねばなるまい。

「どうもをかしい。近頃はまた無闇に浪士共が潜入して、夥しい數に上つてをるが、一向大物らしい奴が發見されぬ。」

土方は頻りに小頸を傾げた。

（――何事かある。）

近藤はじめ、局中幹部達の疑惑は深かつた。國事探偵方の首腦山崎蒸は、躍起となつて情勢探索を續けた。その結果八月に至つて、洛外白川の土佐藩邸内に、陸援隊と稱する浪士隊の組織されてゐることが判明した。横山勘藏を隊長として、岩倉具視に親近してゐる大橋慎三、香川敬三等をはじめ、十津川郷士から諸國の脱藩浪士を網羅して、薩州の兵家鈴木武五郎を聘し、日夜調練を行つて有事に備へ、日々入隊者を加へてゐた。しかも、陸援隊を總管してゐる隊長の横山勘藏こそ、石川誠之助の名によつて志士中に重きを成してゐる中岡慎太郎であつた。

「宮部鼎藏の後繼者が出た。……」

近藤は嘗て三條卿と共に、三千の親兵を總管した宮部鼎藏を思はずにはゐられなかつた。中岡といひ、海援隊の坂本といひ、また本國に在つて過激な討幕論を唱へ、別撰隊と稱する精兵を養つてゐる乾退助といひ、土州油斷ならじの感を抱かしめずにはおかなかつた。

しかし土藩の上層は依然公武一和論であり、老公容堂の如きは會津侯容保と近く、四藩會議の時にも強硬な薩の久光、宇和島の宗城に對し、中途から病に藉口して缺席する程、幕府への好意を示してゐた。

かうして上下相尅の矛盾を孕んでゐる土佐藩の動向こそ、尤も注目に價した。が、それにも増して近藤の憂慮したのは、高臺寺の齋藤から得た政局裏面の動きであつた。中岡の陸援隊組織、乾退助の別撰隊養成等、或は土藩過激派は、藩の上層と分離して薩長と結び、討幕の擧に出る準備を始めてゐるのではあるまいか。これは迂濶には看過ごせぬぞ。――近藤は俄然緊張した。

その後齋藤とも聯絡は取つたが、伊東が不在では確實な消息を握ることが出來ず。近藤は土方に命じて、浪士を斬るよりも捕へることに努めさせた。そして拷問は苛酷に行はれたが、組織の外にある浮浪浪士からは、何の得るところもなかつた。

近藤の焦慮は募るばかりであつた。情報交換のため屢々守護職邸へ出かけた。遂に焦慮のあまり、陸援隊襲撃を會津侯に提言したが、これは土藩との間に物議を釀して大事を惹起するからと、固く差止められた。

果然、九月十一日、島津久光は藩兵一千餘を率ゐて入京した。

二

注目してゐた土佐藩の動向が明らかになつた。九月下旬に這入つて、土藩の參政後藤象次郎が、大政奉還の建白に就いて、幕閣、守護職の間に運動を試みてゐることが判つたのであつた。しかも、守護職會津侯は既に贊意を表し、幕閣の間にも贊成意見があるといふ噂が傳はつた。

近藤は、それを會津藩の公用人小野權之丞から聞いて、愕然とした。直接會津侯に面謁して意見を聞かうとしたが、何度行つても、容保は晝夜の別なく二條城に詰めてゐて會へなかつた。

(よし、この上は建白書が將軍家の手許へ達する前に、後藤象次郎を暗殺するまでだ。)

近藤はさう意を決した。

大政奉還は策として穏和ではあるが、直接の討幕でないだけで、朝廷の御親任を將軍から奪ひ去らうといふ策に外ならない。今こゝで大政を奉還しては、今日まで叡慮に添ひ奉らうと、困難な事局に處して、刻苦精勵して來た大樹公をはじめ幕府の忠勤が、水泡に歸するではないか。漸く外交問題が一段階を告げて、事局安定に一歩踏入つたばかりのところで、功を諸藩の野心に奪はれて何とする。土藩もまた、要するに同じ穴の貉に過ぎなかつたのだ。會津侯をも丸め込むとは、餘程の佞奸家に違ひない。――)

「後藤といふのは、どんな人物ですか。」

近藤は苦り切つて公用人に訊いた。

「若いが、なかなか確りした人物のようです。」

小野權之丞の答へを聞くと、近藤は更に苦り切つて、會津邸を出た。夜であつたが、その足で、藝州入りの時以來睨懇の大目附永井主水正、今は昇格して若年寄玄蕃頭尚志の寓居へ向つた。

永井邸には來客があつた。尚志の居室で面談してゐると見えて、近藤は客間で待たされた。

「御來客は誰方ですか」と茶を運んで來た小姓に訊いた。

「土佐の後藤象次郎殿でございます。」

「なに、後藤」思はず烈しく出た語調を、近藤は急に和らげて、「それはよい折だつた。御用談中失禮ながら、お話が終つてから、近藤が御面談申したいとお傳へ願ひたいが。――永井さんへ申上げて、御來客の御意嚮を伺つて見て下さらんか。」

承知して小姓は出て行つた。――いゝ折だと近藤は思つた。正面から面會を申込んだところで、

應ずる相手ではない。こゝで落合つたのは天佑だ。近藤は刀を引寄せて鯉口を切つておいた。池田屋事付の褒美に會津侯から貰つた、三善長道の大業物であつた。

小姓はなかなか戻らなかつた。が、間もなく何か高笑ひが聞えて、尙志が這入つて來た。五十歳を出たばかりの、有司らしい上品な人物で、糺問使として藝州入りをした時から見れば、一段と若年寄らしい貫錄を加へてゐた。その背後に、まだ三十にはなるまいと思はれる、餘り大柄でない若い男が從つてゐた。

後藤だなと思つて、近藤は隙を狙ふ猛禽のやうな眼を上げた。

直ぐ座に就いた永井尙志の紹介で、初對面の挨拶を交はした。

「時に近藤君、わしは急に板倉さんの所へ出向かなければならんのだが、何かお急ぎの御用かな」と永井が訊いた。

「いや、今夜に限つたことではありません。」

事實、當の後藤を捕へた今となつては、特に永井を訪問した意味はなくなつてゐた。

「では、後藤君と話してゐて下さらんか。そのうちにわしも戻つて來る。後藤君は君が來たと聞いて、君からの面談の申込みに先立つて、會ひたいといつてをられたのだ。丁度よい折ではないか。」

（當邸で會へば安全だと思つてゐるんだな。何を、場所など問ふことか。――）

近藤は心中で嘲笑つた。永井は兩客を殘して出て行つたが、近藤の眼には殺氣が漲つてゐた。

對談に移らうとする途端に、後藤は不意に自分の刀を取上げて笑ひ出した。

「近藤さん、わたしは性來こいつと長蟲が大の禁物でしてな。まづこれを除いた上で、胸襟を開かうではありませんか。」

近藤は破顏一笑、覺えず釣込まれて自分の刀を手にした。こやつ看破つたなと思ひながら、後藤が刀の鐺を持つて、遠く床寄りに押しやるのを見て、彼もそれを眞似た。しかも後藤の場合は左手だつたが、近藤の場合は床が右手に當つてゐた。

二人は顏を見合せて、いかにも芝居をやりましたなア、といふ風に聲を擧げて笑つた。

「わたしのことに關しては、既にお耳に這入つてをりませうが、わたしはこの度の運動に就いて、身邊の危險を感じてをります。洛中の治安に任じて、聲望實力共に備へてをられるあなたにお眼にかゝつて、是非共保護と御盡力を、御依賴しなければならんと思つてをりました。」

「皮肉ですか。」

近藤は茫然たる態度で、鋭く斬り返した。

「さういはれるあなたを、豫想せんでもなかつた。しかしこれは後藤象次郎一個の問題ではない。後藤の身を保護されることは、建白を保護されることであり、建白を保護されることは、國家を保護されることです。從つてこれは治安のためであつて、あなたの義務であると愚考します。」

「青二才、この論法で守護職や有司を籠絡するんだな、と近藤は思つた。彼は苦笑して皮肉に出た。

「後藤さん、近藤は大久保剛の稱名を許されて、幕臣に列した直參です。大樹公に大政奉還を建白される、あなたの身邊を保護することは、些か筋違ひであると思ひますが。……」

「如何にも仰せの通りです。然もそれを敢てなさらなければならないところに、我が藩主父子、並にわたし共と同じ苦衷が存しませう。」

「お言葉ですが、近藤には、大樹公から政權を奪つて、至誠奉公の道を失はしめ、今日まで苦心、慘澹漸く事局安定に瀆ぎつけた幕府の功を、一朝にして薩長の野心に委ねるが如きことを、敢てしなければならぬ理由は毫もありません。大政奉還の如きは、僕の斷乎として反對するところです。」

「あなたは今日の逼迫した情勢を、御存じありませんな。德川家の社稷が完うされず、德川家が朝敵の汚名を蒙ることを、意に介しないといふ御存慮ではありますまい。」

「不思議なお話だ。何故德川家が朝敵の汚名を蒙る理由があります。どうして社稷の絶える憂があります。」

「今日の事態は、最早理窟ではありません。祭政一致、御親政に復ずといふことは必須の勢ひです。薩長二藩の野心云々は姑く問はず、御親政實現のために、擧兵討幕を策してをることは、あなたも御承知であらうと思ふ。薩兵の既に洛中に這入つてをるのは、御覽になる通り、また洛中に兵を駐めてをる大藩では、藝州が薩長に歩み寄つてゐる。その他宇和島以下の、薩長に追隨する小藩は枚擧に遑がありません。我が土佐藩に於ても藩論二分して、一朝討幕擧兵の聲を聞かんか、藩を脱して、相應ずる者幾許に達するやは、計り難い情勢にあります。我が藩の內情にして既にそれです。諸藩が薩長に對して、如何なる氣脈を通じてをるかは、思ひ半に過ぎるではありませんか。」

「……」

そんなことは百も承知だ、と近藤は眞向きに相手の眼を見据ゑた。

「他藩は措くとするも、かゝる情勢の下にあつて、薩長二藩を敵とし、果して幕府に勝味があるかどうか、これも征長役の事實に照らして、甚だ危ぶまざるを得ない。しかもこの度は、勅命による征長戰の場合に較べて、遙かに立場が不利であり、その上不意を衝かれる危險があります。のみならず、この情勢が座ふべくもない事實でありながら、幕府が機先を制して、征薩征長の師を起すに

は名目がない。強いて兩藩の戰備を難詰せんか、相手に準備既に成つて、討幕の名目があつたとすれば、これはまつたく藪を突いて蛇を出すの例となるでせう。更に征討を强行するとしても、いづれの藩を信じて令すべきか、行く先々が敵地であるといふ危險もまた、豫想せられねばなりますまい。しかも幕府の財政は、今日出師の困難であることを告げてゐる。かくして、幕府の立場の四面楚歌であるに對し、薩長二藩の裏面工作は、既に討幕の密勅を拜するまでに進んでをるかも計られません。わたしはその運動に就いても、既に噂を耳にしてをる。これを事實とすれば、坐して待つも朝敵、進んで討つも朝敵、幕府は拔き差しならぬ窮地へ追込まれてゐることは、既にお解りであらうと思ふ。しかも國内に禍亂を惹起して、外國に乘ぜられるが如き事態は、最も好ましからず、如何にしてこの窮地を切拔けるかは、一德川家の問題たるに止まらず、我が國今日の運命の、重大關心事といはねばなりません。」

「……」

反駁、疑議、質問がむづむづして來るのに喘ぎながら、近藤は相手の息も繼がぬ熱辯に捲し立てられて、息を詰めてゐるばかりであつた。

「近藤さん、かゝる危機を招來してをる原因は、單に幕府の存在それ自體にあるといふ、重大な一事を見落してはなりません。御親政に復すること、この一事によつて、禍亂は未然に防げ、危機は免れることが出來る。このために我が藩公父子は、大政奉還の已むなきに思ひ至つたのです。毛利島津の兩家は關ヶ原以來、德川家に對して含む處ある宿因の家柄です。しかし我が山内家は、祖先一豐公の勲功によつて、掛川六萬石より、土佐二十四萬石に封ぜられた恩顧ある家柄として、今日德川家の社稷危ふきを座視するに忍びず、一は朝廷への微忠を致し、一は德川家への恩顧に酬ひんため、ひとり諸藩の列を去つて、大政奉還の建白に趣つた微忠は、既に會津侯に於かれても諒とせられたところです。今日外交のこともひと先づ落着、事局安定の一歩へ踏出したことを以て、幕府最後の御奉公とし、謹んで大政を奉還するの擧は、有終の美を成すにあります。しかもその身、一諸侯に下つて、國内の禍亂を未然に防止するの美擧は、これこそ德川家の以て誇りとするところではありませんか。朝廷におかせられても、大樹公の微衷を汲まれ、從來盡し來つた勲功並に位階家格等を思召されて、廟堂に重用せられ、必ず諸侯の首班を以て目せられるであらうことは疑ひを容れません。さすれば幕府ゆゑに敵を持ち、幕府ゆゑに衰退した德川家は、全國諸侯中、第一の雄大藩たるを失はず、大政を奉還したことによつて、一躍覇を回復することが出來る。たとひ薩長二藩に、如何なる野心があらうとも、最早これを抑へるは容易であり、德川家の位置は安固として、動

かすべからざる存在となりませう。至誠奉公の洵、家運の回復、社稷の完ふ、このために我が藩主父子並にわたし共は、誠心誠意を以て、大政奉還の建白書を上るため、日夜寢食を忘れてをります。今にして一歩を誤らんか、徳川家の朝敵となり、社稷を危ふくせんこと、火を見るよりも明らかです。——近藤さん、建白運動の保護を以て、あなたの義務だと申上げたわたしの言葉に、誤りがありませうか。」

近藤は幾度か口を挿まうとして、隙のない後藤の辯舌に妨げられ、次の言葉を聞いてゐるうちに、反問の必要がなくなつて、また口を挿まうとする間もなく、次の言葉に解答され、さうして遂に終りまで默り通して、傾聽を餘儀なくされた。しかも感激が次第に瞼の熱さを加へ、肚の底から納得のゆく、大きな肯きを以て聽き終つた。

近藤は深い溜息を吐いた。高臺寺の齋藤から得た情報を思ひ出した。尊賀足許には火がついてゐるのかも知れない。堰くを得ない趨勢。——幕府は瓦解を免れ得ないのか。そして藩府の瓦解が、同時に徳川家の亡びることにはならなかつたのか。政權を失ふことによつて、至誠奉公の洵が達せられる。廟堂の重用……成程、さうであつたか。近藤は繰返し心に肯いた。

青二才の後藤象次郎が、急に偉大な經綸家に見えて來た。遊蕩に馴れた輕薄な才子のやうな印象が、輕羅を剝ぐが如くに變つて來た。さういへば眼光の深さも、口の締りも、尋常の男ではない。近藤は相手を見上げる氣になつて、ふと、久坂玄瑞はかういふ人物ではなかつたかといふ氣がした。それと同時に聊か慚かしくなつて、肩を聳かして微笑した。

「いや、後藤さん、よく解りました。僕はあんたを誤解してをりました。」

後藤は親しさうに頷いた。

「お話を承つて、土州侯御父子、並にあなた方の至誠の情誼から出た建白の御主旨が、成程時宜を得たものであることが解りました。守護職におかれても御賛同とあるからには、僕も微力ながら御援助申したい。」

「いや、御賛同を得て何よりです。」

「御身邊の警戒は、隊に於て保證いたしませう。」近藤は床の間の方へ押やつた刀を見て「實は、僕はあんたを斬るつもりでをりました。」

「さうでせう。わたしもあんたを危いと思つてをつた。あんたの御賛同を得れば、もう保護も警戒も要りますまい。」

二人は聲を揃へて哄笑した。

× × ×

近藤は土方以下の幹部達に、土佐藩の建白運動を諒解させた。そして「土州の後藤象次郎と、坂本龍馬には無禮のないようにと」局中に布令した。

坂本龍馬のことは、永井邸で後藤から詳しくその人物を聞き知つたからであつた。――大政奉還の建白が坂本によつて立案されたこと、建白書の内容が、坂本の提出した八策に基いてゐること。時局を憂へて一點の私心なき人物であること。政局に野心なく、ひたすら國威宣揚と、海軍及海運の振興に力を盡してゐること。これ等のことを聞くと、間接ながら近藤は坂本の人物に深く推服した。

十月一日、近藤は後藤を寓居に迎へる約束であつたが、建白運動の多忙のためか、遂に對面が出來ないまゝに、建白書は將軍の手許に達し、十三日、將軍は二條城に諸藩の重臣を召して、政權奉還の微衷を述べた。

十四日、慶喜は大政奉還の上表を朝廷に上り、翌十五日、朝廷はこれを聽許あらせられた。「神祖天下安からんがために政權を執り、今や自分は天下安からんがために政權を奉還する。道は背馳するに似たれど、皇謨を贊襄するの至誠は同一である。」

さう述べた慶喜の言葉を傳へ聞いた近藤は、大樹公の御心中如何ばかりであらうと、そゞろに涙を禁じ得なかつた。

慶喜は更に廿四日、征夷大將軍の職を辭したが、政權奉還に際して下された「諸大名を召集するまでは舊に依るべし」との勅諚を奉じて、二條城に在つて固く臣下の動搖を戒めてゐた。

三

十一月十日、高臺寺からひよつこり齋藤一が不動堂村へ歸つて來た。

齋藤の傳へるところによると、高臺寺では伊東等が旅から歸つて、今日の形勢に頓に氣勢を擧げてゐるとのことであつた。――長い期間王政復古の妨害をなし、擧げて勤王志士の斬殺に努めて居つた新選組は、今日こそその罪が決定したも同樣であり、當然誅伐を受くべきだ。高臺寺黨は新選組出身であるが故に、誤解してゐる向きもあり、旁々會津邸で斃れた、佐野等同志の復讐もしなければならぬ。新選組は飽くまで高臺寺黨の手によつて、殲滅すべきであると話合つてゐる。――といふのであつた。

土方は激怒した。

「よし、機先を制して、こちらから掩殺してやる。月眞院の裏山から大砲をぶつ放し、高臺寺を包圍すれば、奴等を一擧に葬ふのは容易いことだ。局長、躊躇する場合ではありますまい。」

「いづれ衝突と決れば、機先を制する他はあるまい。殊に彼等は分離の形式で別れたが、事實は脱退によつて隊規を犯し、隊を攪亂してをる。その上我れわれを狙つてをるなどは、赦すべからざる存在だ。しかし、土方君の策はよろしくない。守護職から特に戒心の沙汰の出てをる時だ。大砲や燒打は禁下にあつて、この場合甚だ穏かでない。落着いて最善の方法を採るべきだ。」

近藤は一應切迫した事情を肯定しながらも、逸る土方を戒めた。

その翌朝から、近藤は底冷の始まつた京の寒さに、風邪に冒され、高熱を出して醒ケ井の妾宅で寢込んでしまつた。二三日過ぎて熱が下つてくると、土方、沖田、永倉、原田、井上、その他山崎、大石など、交る代る枕元へ來て話込んだ。

すると十六日の午前、前夜祇園へ遊びに行つて泊つた伍長の島田魁と林信太郎が、慌てた樣子で還入つて來た。

「局長」と、島田は急込んでいつた。「昨夜坂本龍馬と、中岡慎太郎が斬られたさうです。」

「なに、坂本が殺られた。」

近藤は思はず床の上に起き直つた。

「河原町の、坂本の下宿の醤油屋の二階で、坂本は腦をやられて腦漿が飛出し、中岡は十數創を蒙つて頻死だといひます。」

「刺客は何者だ。」

「目ぼしがついてをらぬさうです。」

島田と林が交々語るのを聞いた近藤は、深い嘆息を洩らした。

「さうか。……殘念なことをしたな。坂本には一度逢ひたいと思つて、後藤にも通じてあつたのだが。……」

居合せた土方も原田も、まるで味方の遭難を聞いた時のやうに、憮然として腕を拱いた。恰も人を斬つた覺えのない人間ででもあるかのやうに。……

「佐々木の連中だな。大政奉還で、見廻組は大分捨鉢になつてをるといふから。……」

暫く經つてからいつた近藤は、不意に眉根を寄せた。

「これはいかん。隊へ嫌疑がかゝるかも知れんぞ。土佐藩から嚴談があるかも知れんし、坂本も中

岡もそれぞれ海援、陸援の兩隊を持つてをる。嫌疑がかゝれば、自然隊が襲はれぬとも限るまい。……困つたことになつたものだ。仕方がない。土方君、局中に布令して、とにかく警戒するよう手配して貰はう。」

近藤は憂鬱さうであつたが、更に眉をひそめた。

「もう一つある。高臺寺が忠義ぶつて、我れわれを狙ふ期を早めるかも知れん。これは愈々高臺寺を放つておけないことになつたぞ。」

近藤のまだ熱のある眼が異様に輝いて來ると、一同は見る〳〵緊張の色を泛べた。

× × ×

近藤の招きの手紙が、高臺寺の伊東の手許に屆いたのは、十八日の午前であつた。

高臺寺の幹部達は、伊東の不動堂村訪問を頻りに諫止した。

「いや、行つて見よう。逃げたと思はれるのも業腹ではないか」と伊東は笑つた。

「しかし要心に如くはありますまい。近藤に會ふのは利益がなくて、危險があるばかりだ。それに鴨藤の奴が、先達て無斷で不動堂へ歸つてをる。こいつがどうも危い」と篠原が危んだ。

「鴨藤はこゝで脾肉の嘆を喞つてゐるより、不動堂村へ歸つて、人を斬る方が性に合ふのだ。あんな單純な男だから、退屈して歸つて行つたんだ。心配したことはない。近藤の手紙には、國事に就いて話したいとあるが本當だらう。あの男は今日の形勢を見て、惱んでをるに相違ない。自信がなくなつてをるのだ。よく話して聞かせれば、或は思はぬ良い結果が得られるかも知れない。惡く行つても、坂本さん中岡さんを襲つた刺客の、手掛りが得られるかも知れない。」

「では僕が一緒に行きませう。」

「君がゐては却て喧嘩になる。それに近藤は案外な見榮坊だ。人がゐては不明を悟つても、素直に頭を下げたがらない。なに、まさか斬るような眞似はしまいよ。」

伊東はまだ鴨藤を間諜だとは氣附いてゐなかつた。案じてゐる一同を殘して、駕籠でひとり醒ケ井の妾宅へ出かけて行つた。行つて見ると豫期とは違つた賑かさで、土方や原田や山崎が來合せて騒いでゐた。

「伊東さん、今日は二人でお話がしたかつたのだが、御覽の通り皆がやつて來て、久し振りだから、あんたとお話がしたいといつて歸らんのです。殘念だがお話はまたのことにして、今日は皆と一緒に愉快に過して下さい。」

近藤はそんな辯解をして、直ぐ酒にした。

別段喧嘩別れをしたことになつてゐるわけではないし、まして先頭まで寢食を共にした舊友同士とて、有り得ることだと伊東は深く氣にもしなかつた。

「齋藤君が歸つてをるさうですな。」と伊東がいふと、近藤は笑つて頷いた。

「あの男は、矢張りこちらで暴れてゐる方がよいといつて、戻つて來てをります。無斷で出たさうですが、今更不動堂村へ歸るといひ出すのが、極りが悪かつたのださうで、今日あなたが見えると聞いて、よろしく取なしておいてもらひたいといつてをりました。」

そこへ、池田小太郎、大石鍬次郎、吉村貫一郎などがやつて來た。伊東先生、伊東先生と、珍らしさと懐しさを見せて盃を差す。打解けて談笑する樣子に、また他意あるとは見えなかつた。

佐野等の事には、どちらからも一言も觸れなかつた。酒宴は夜に入つて、五つを過ぎてから、伊東は漸く暇を告げる隙を見出した。近藤は「これからは時々お逢ひしませう。」といひ、誰かを見送らせようといつた。それを斷つて伊東は一人戸外へ出た。

比叡嵐が靜まつた冬の夜は、皮膚が痛いまでにしんしんと底冷がする。滿月から四日目の月が、霜をおいたやうに路を照らして、息が月光に白く凍るやうであつた。

伊東は用意して來た提燈が不用になり、それを腰に差して謠曲を口にしながら歩いて行つた。何しろ八つ過ぎから飲み通した酒であつた。氣持は確かであつたが、足許が路を波形に縫つてゐるのが自分にも判つた。しかし醉つてゐる氣持が、結局快よかつた。駕籠らしい燈は見當らず、乘りたくもなかつたので、伊東は躰が泳ぐまゝに蹌踉と歩んで行つた。

木津屋橋を東に渡ると、元治元年の兵火にかゝつた右手の燒跡を月が照らして、まばらな家の遠い甍を光らせてゐた。片側は寺に續いた板圍ひ、ところどころ破れた圍の間から枯草が覗いて、邊りは寂漠たる靜けさであつた。

「えいッ。」といふ鋭い氣合が板圍の間に起つた。伊東がはつと身を避けようとした瞬間には、既に燒けるやうな痛みが、背から吭を貫いて、自由が利かなかつた。突拔けた槍先の光が、忽ち吹出る血汐に染められた。

× × ×

油小路の町役人が月貫院へ駆込んで來て、菊桐の提燈を持つた衞士らしい武士が、七條の辻で殺され、新選組の巡邏兵が番をしてゐるから、死體を檢めて引取つて貰ひたいと告げたのは、九つ近くであつた。

歸りの遲い隊長の身を案じて寢もやらず、協議を凝らしてゐた矢先、一座は愕然とした。

「提燈を持つて出た者は、隊長以外にない。」
「賊は新選組だ。」
「近藤、土方が欺し討つたのだ。」
悲嘆よりも、無念よりも、先づ沸然として一同憤怒の極に達した。座中は篠原泰之進、鈴木三樹三郎、藤堂平助、服部武雄、加納鵬雄、毛内有之進、富山彌兵衛の七人であつた。阿部十郎と内海二郎とは、明方から山崎へ山狩に出掛けたまゝ歸つてゐなかつた。新井忠雄と清原清は江戸へ下つて不在。橋本皆助は先頃伊東の諒解を得て、水野八郎と改名の上、聯絡の必要から白川の陸援隊へ投じてゐた。

一同は暫く悲憤の涙を呑んだが、やがて服部が憤然と立上つた。
「相手が相手だ。新選組と決つた以上、この死體引取りには甲冑の用意が要るぞ。」
「しかし何分夜中の上に、この小勢だ。いづれ面識ある奴等だらうから、今夜は一應知らぬ顔をして、禮を以て受取ることにしてはどうだらう。その上で後圖を策した方が賢明ではないか。」
「駄目だ。」と鈴木の言葉を服部は言下に退けた。「隊長をおびき出して、欺討にするやうな卑怯な奴等だ。策があるに違ひない。行けば今夜は斬り死だ。斬つて斬つて斬り捲つてやる。」

「さうだ。」と篠原が口を挿んだ。「敵には策がある。さうかといつて敵を恐れ、隊長の死體を路傍にさらしておくわけには行かない。かうなつた以上、策に陷づたと知つて、策に乘ることも已むを得ない。しかし、物々しく甲冑に身を固めて行くことは考へものだ。路頭に討死するにしても、若し萬一巡邏の奴等が、素直に死體を引渡すとしても、これは物笑ひになる。」
「うむ、それもさうだ、ではどうする。」と服部が頷いた。
「平服のまゝで行かうぢやないか。普通に死體を受取りに行くのだ。心構へだけしてをればよい。」
結局篠原の意見に落着いて、相談は一決した。先頃からぽちぽち高臺寺へ集つてゐる隊士達には、傳へないことにして、垂鑑の人足二人、小者一人を連れて、七人だけで出かけることにした。
「しかし無駄に命を捨てるなよ。」
出掛けに篠原はかう注意した。
油小路七條の四辻に着いたのは、八つ近くで、霜月四更の月光と、寒氣に夜は凄い程森閑と靜りつ返つてゐた。霜に白い道の眞中に、人らしい黒い影が横つてゐる。駈け寄つて見るとそれが伊東だつた。血糊が霜に凍てゝ、羽織も袴もところどころカチ〳〵になつてゐた。一同慘として聲を呑んだ。

「見張つてゐろ。」と篠原がいつた。

加納が駕脇に立つて、じろじろ邊りを見廻してゐると、白い息のやうなものがふうッと流れた軒影に、きらりと光るものがあつた。

「來たぞ。」と加納は注意した。丁度死體を駕の中へ運び入れたところだつた。みんな一齊に立上つた。二人の人足と小者岡本武兵衛とは、地を匍ふ蜘蛛のやうに逃げ出した。が、敵方は三人には目をくれなかつたと見えて、四方の物影から姿を現はして迫つて來た。青い劍光が一閃、二閃と增えて來る。……およそ五十人近い人數だ。七人は拔き連れた。

「血路を開いて落ちろ。」

さういひ殘すと、篠原はぐんぐん前面の敵に向つて踏み出して行つた。

殺氣が凝つて、凄愴な沈默が深まつて行つた。篠原の凄じい氣合が聞えた。加納の叫びが續いた。呻きが流れて、どしんと倒れる地響がした。それから叫喚と、刀の觸れる音と足音とが入り亂れた。

服部武雄は脫れる氣はなかつた。どこまで斬れるか、斬れるまで斬つてやらうと思つた。腰に馬乘提燈を差したまゝ、三尺五寸の長劍を閃めかした。服部の劍は、京都浪士中隨一だらうと評判されてゐた。新選組にあつても、彼に立向ふ者は沖田一人だといはれた。その唯一の沖田は、この夜躰が惡くて、不動堂村の本營に寢てゐたのであつた。

新選組の方は、いづれも鎖を着込んでゐた。が、服部にかゝつては素肌も同樣だつた。近寄れば、澄み渡つた月下に切り裂かれた。

戰づてゐて敵味方顏がよく見えた。皆ては君と呼び僕と呼んで、起居を共にした者ばかりであつた。異樣な悲憤が湧いた。服部は次第に血を浴びて眞赤になり、月光に凄い形相を見せた。手傷もあれば返り血もあつた。彼は遂に兩刀を拔放つて、左右の敵に對した。しかも容易に疲れを見せず、觸るれば皆墜つの有樣であつた。

原田は服部を敵に廻したこの夜、はじめて服部の超人的な劍技を見た。彼は感嘆した。同時に一騎討以外、彼を殪す方法のないことをも見て取つた。斬つて斬られるか、斬られて斬るか、勝負をその一瞬に決する以外、如何なる手段も味方を損傷するばかりだつた。それは眼前に裏書されてゐた。衆を恃んだ味方は、踏込んでは一瞬に傷いて退いた。遂に原田は長槍をしごいて躍り出た。彼は一太刀浴びた。が、相手の服部も轉倒してゐた。

この時、毛内有之進が既に殪れてゐた。

藤堂平助の奪戰もまためざましかつた。新選組創設以來、近藤の四天王として、幾多の實戰を經

て來た北辰一刀流の劍は、最後の威力を見せて斬り捲つた。近藤は藤堂だけは逃がしてやりたいと、幹部の者に話してゐた。この手に向つてゐた永倉新八も、藤堂に向ふに忍びなかつた。永倉はわざと道をあけて逃がさうとした。藤堂にはそれを顧慮してゐる暇はなく、唯、血路の開けたのに勇躍して駈出さうとした。その背後から隊士の三浦常次郎が追討に一太刀浴びせた。よろめいて振り返つた藤堂は、月に三浦の顏を見ると吻と怒つた。新選組にゐた時、自分の配下にゐた三浦には、非常に目をかけてやつてゐた。その三浦の忘恩の刄であつた。憤怒に燃えた藤堂は、三浦を追つてまた猛然と引返した。もう落ちる氣はなかつた。暴れに暴れた末、滿身創痍となつて、遂に溝の中へ斬り込まれて果てた。

落ちたのは篠原、鈴木、加納、富山の四人であつた。

服部は全身二十數ケ所の創を負ひ、兩刀を兩手に握つたまゝ、鮮血に塗れ、大の字になつて、見るも壯烈な最期を遂げてゐた。歳僅かに二十五であつた。藤堂は二十九、毛内は三十八歳であつた。

新選組では卽死三人、重輕傷各十數人に上つた。衛士方の死體だけを殘して、一應總員が引揚げると、七條油小路の四辻は元の靜寂に返つたが、やがてほのぼのと白んできた昧爽の微光の中に、十數本の手指が散亂し、町家の戸には血痕が點々と飛散つてゐた。壁には、髮の毛の附いた肉片が粘りついてゐた。

×　×　×

近藤の豫想は適中して、坂本、中岡暗殺の嫌疑は新選組にかゝつてゐた。これに油を注いだのは、その直後に行はれた高臺寺の掩殺であつた。新選組は斷末魔の狂暴に駈られてゐるのだといはれた。近藤は永井尙志に喚問された。しかし、何分にも擧げられてゐる證據が確實でない。

新選組への嫌疑が濃厚になる反面、他へも探索が進められた。――備後鞆の津沖で、海援隊のいろは丸と紀州藩の明光丸とが衝突した時、航海知識に明るい坂本は、國際公法に照らすといつて、紀州藩に迫り、沈沒したいろは丸の賠償金七萬兩を取つてゐる。この舊怨によつて、刺客は紀州藩が放つたのであらうともいはれた。偶々紀州藩の公用人三浦休太郎が、大垣藩の井田五藏と通じて、王政復古の阻止に熱中してゐると喧傳され、彼が坂本暗殺に、新選組を使嗾したのだといふ者が出た。

果然三浦は海援陸援の兩隊士に狙はれるところとなつた。しかも紀州藩の依頼によつて、新選組は會津侯から三浦の護衛を命ぜられるといふ、皮肉な廻合せとなつた。近藤はこの際、この役目を好まなかつたが、命を奉じないわけには行かなかつた。

十二月七日の夜、陸奥陽之助以下海援陸援の聯合隊士十數名は、三浦の旅宿を襲撃した。護衛に詰めてゐた紀藩士及び新選組はこれを邀撃ち、三浦の遭難を微傷に喰止めたが、武州多摩から來てゐた近藤の實家の一族宮川信吉を失ひ、その他にも手負を出した。しかも守護職の聲掛りで働いて、恩賞の沙汰のなかつたことは、これがはじめてであつた。また志士が斬られて坂本の場合の如く、下手人探索の嚴しいことも、嘗て見られないところであつた。威權はまさに位置を換へた。

四

十二月九日、維新王政復古の大號令が渙發せられた。三浦襲撃事件の翌々日であつた。

廟議に預かつたのは、尾、越、薩、藝、土の五藩で、慶喜の征夷大將軍辭職は聽許されたまゝ廢され、會桑二藩はそれぞれ守護職、所司代の職を解かれた。

岩倉具視の參朝、三條實美等五卿の復官入京が允許せられ、長藩父子の勅勘は赦免となり、薩津打出の濱に陣して、待期してゐた藩兵の入京が差許された。續いて召命による諸藩の兵は續々洛中に這入つた。蛤門守衛の會津兵には土佐藩兵が代り、公家門の桑名兵は薩兵と代つた。

會津、桑名の二侯は兵を率いて二條城に引揚げたが、城中は沸騰する騒ぎであつた。彦根、津、大垣等の佐幕藩諸侯藩士、及び大政奉還の時から、續々江戸を發つて上洛してゐた旗本諸隊等の憤激は、その極に達してゐた。

「さきに朝廷が廣く諸藩を京都に會し、公論によつて國是を定むべしとあつたのを無視して、五藩によつて改革を斷行した上、政權返上の誠意を以て、維新の皇謨を贊襄する德川氏の君臣を疎外するとは不當極まる。」

「薩藩が私意を行つたものに相違ない。」

「我れわれは薩藩を斥け、君側の奸を清めて、公明の政を布かねばならぬ。」

恰もかゝる囂々たる憤激の中へ、尾張慶勝、越前春嶽の二侯は、辭表聽許の御沙汰書を携へて、辭官納地の內諭に江戸へ下つた。慶喜は謹んで命を奉ずる旨を答へ、しかし、人心沸騰の際であるからとて猶豫を乞うた。が、これによつて城中の悲憤は更に昂り、變亂は今にも勃發するかと思はれる形勢となつた。

十二日城內の形勢を憂慮した慶喜は、闕下に暴發の起ることを惧れ、夜陰秘かに大坂へ下つた。これによつてさしもに火のつきさうな騒擾も、一時緩和を見るに至つたが、火はそのまゝ前將軍を

追つて大坂に移つた。

二條城には、若年寄永井尙志が留つてゐた。大場一心齋の率ゐる水戸の藩兵二百と共に、新選組も見廻組も詰めてゐた。

「後藤象次郎に計られた。何が廟堂に於ける重用だ。何が全國一の雄藩だ。辭官納地とは何事だ。徳川家を罪人扱ひにするとは。……」

近藤は無念に切齒し、悲憤に涙を流して、自ら不覺を浩歎し地だんだ踏んだ。

「斬るべきであつた。――矢張りあの時斬るべきであつた。」

が、容堂、後藤が共に廟堂に立つて公正を唱へ、慶喜の廟議參與を力說して容れられなかつたことは、近藤のみならず、まだ二條城の誰の耳にも達してはゐなかつた。

水戸の大場一心齋は、薩長に通謀する氣配があつた。近藤はこれを看破して猛然難詰した。激論の末喧嘩別れとなつて、近藤は憤然京都を去る決心をした。

總員六十六名、新選組は思ひ出多い不動堂村に入り、それから伏見まで引揚げた。近藤は大坂に還入つて前將軍の護衛に任ずるつもりであつた。その意を會津の公用方へ通じたが容れられず、伏見にあつて薩長兵に備へるため、伏見奉行の兵と合して、警備の任に就くことを命ぜられた。こゝで會津兵の應援を得、また大坂方面から急募に應じて來た浪士を合せて、新選組の總員は百五十名となつた。

形勢は日に急迫を告げ、龜山、若狹、姫路、肥前の諸藩大坂に心を寄せれば、備前、因州、大村、大州、新發田、平戸の諸藩は薩長に款を通じ、今や慶喜の意志の如何にかゝはらず、戰機は刻々に至るの有樣であつた。

十二月十八日の朝、近藤は肥馬に跨り、二十人程の供を從へて京へ上つて行つた。永井尙志に招かれて、軍議の打合せに二條城へ行くのであつた。

伏見寺町の具足屋の見世裡から、憎惡に燃える二つの眼がじつとそれを見送つてゐた。高嘉寺殘黨の一人阿部十郎だつた。阿部は、買物もそこそこに薩邸へ馳せ歸つて行つた。新選組は誰一人それに氣づかなかつた。

× × ×

八つ頃、軍議の打合せを終へた近藤は、供の隊士を城内へ殘すと、唯一人馬丁の久吉だけを連れて城を出た。

空は晴れて、雪を頂いた比叡颪は刺すやうに鋭く、皚々の雪は冬の陽に眩しく輝いてゐた。足許

には冷たい蹄が戛々と音を立てゝゐた。

文久三年以來、五年の星霜が移つた。清河八郎の策に騙されて思はぬ地位を得、後藤象次郎に騙されて、本營にさへも住めぬ身となつた。薩長との衝突は必至だ。戰の結果は豫測を許さぬ。五年間の榮枯盛衰。……昂然と肩で風切つて、諸人を畏服せしめた日、祇園の灯、島原の灯。……いま馬を進めながらも、擦れ違ふ人々に警戒の眼を放つてゐる自身を思ふと、近藤の感慨は實に無量であつた。もしもこれが京の見納めになるとすれば。……近藤が一眼逢つて別れを告げたいのは、祇園山絹のお芳でもなければ、島原の金太夫でもない。醒ケ井のお幸よりも心にかゝるのは駒野であつた。不安の中にたゞひとり、どんなにおとづれを待佗びてゐるであらう。……可哀さうに、と心から思へる女。その女のために、薩邸近くの三本木へ、危險を冒し、陣笠に面を伏せて、近藤はいま馬を進めて行くのであつた。

「似てゐる。……」

ふとさう思つた。久坂が天王山の陣所から駕籠を馳せて、おたつに逢ひに行つた時と、周圍の情況までそつくりだ。後を困らぬように、所持金を渡してやらうと考へて來た心持まで、そのまゝであつた。——解る、久坂の心持が解る。……そこまで考へて、近藤はふと愕然たるものを覺えた。

おたつは困らぬだらう、久坂の同志が、誰か面倒をみてやるに違ひない。しかし、駒野にはそれがない。もしも戰に敗れて、この近藤が京の地を踏めぬことになれば、誰がおれに代つて駒野を見てくれよう。……事情の善惡にかかはらず、大勢はこゝまで來てゐる。戰に敗れゝば、我れわれの足跡はこゝで終るのだ。しかも久坂の場合は、彼が死んでも、今日の來ることを信じることが出來た。……

近藤は寒々とした氣持にならずにはゐられなかつた。

駒野とは束の間の別れを惜んで袂を分つた。

× × ×

近藤が供の隊士を引連れて、壬生の舊屯所へ廻り、八木源之丞方へ挨拶に寄つて、思ひ出多い島原の近くを歸りかゝつたのは、七つ頃であつた。愛宕の肩にかゝつた弱々しい夕陽が、寒々と眩しかつた。

一行のため道を片側によけて、急ぎ足に歩いてくる女があつた。近藤は見るともなく馬上からその女を見下した。女もふと馬上の近藤を仰ぎ見た。

上と下とで、微かな驚きの聲をあげたのは同時だつた。女は驚きのまゝの眼を瞠つてそこに突立

つてしまつた。近藤が深く劬るやうに會釋すると、女は始めて、狼狽しながら丁寧な挨拶を返した。

しかしそのまゝ別れ過ぎた。おゝ、こんな時、おたつに最後の對面をしようとは。……

「局長、あれは何者ですな。」と馬側の島田魁が近藤を見上げて訊いた。

「――久坂玄瑞の情婦だ。」

近藤は不機嫌なぎこちない聲で答へた。――何といふ皮肉な時に逢つたのであらう。いづれ再會の日があるといつた、その日が遂に來たのであつた。しかもこのような新選組の落日の時に。……

（――おたつはまた藝者に出たのであらう。おれが近藤であることは知るまい。知つてくれない方がいい。しかし服裝が隊の者であることを示してゐる限り、おれの何者であるかは、行人に訊いても判らう。するとあの雨の夜の、敵方の不可解な好意を、おたつは何と考へるであらう……）

「局長、まだ見送つてをります。」と島田がいつた。

近藤は無言のまゝ馬の足を速めた。

竹田街道から伏見街道へ出て、藤ノ森神社の邊まで歸つて來たのは、比叡嵐の靜まつた底冷たい黄昏であつた。物影には夕闇が影濃く這つて、葉のない梢が痛いやうに夕空を刺してゐた。

突如、一發の銃聲が夕の空氣を劈いた。

近藤の躰は馬上にゆらめいた。一瞬、肩から胸へかけて、疼くやうな痛みが貫いたが、そのまゝ耐へて、がばと伏した鞍壺に獅嚙み着いたまゝ、渾身の勇を單めて馬腹を蹴つた。馬はまつしぐらに駈け出した。

隊士達は愕然として周圍を見廻したが、神社の附近にあばら家が點在するのみで、人影は見えなかつた。局長が傷いて脱れると見ると、隊士達も後を追つた。島田は近藤の身を氣遣つて、刀で馬の尻を叩きながら無我夢中で走つた。

この時神社の附近から、不意に五六人の人影が刀槍を揮つて斬つて出た。隊士の中には邀へ擊つ者もあつたが、島田は近藤に從つてたゞ一散に駈けた。

本陣の奉行所の前で、近藤は島田の肩へ轉落した。豫想以上の重傷で、よくも落馬せずに走つたものだと、人々は感嘆した。

隊士達が追々歸り着いて、敵中に篠原泰之進がゐたと報じた。鈴木三樹三郎を見たといふ者もあつた。いづれにしても、高臺寺殘黨の復讐であることは疑ひを容れなかつた。平隊士ではあるが、近藤が特に撰んで護衛の供に加へてゐた石井清之進と、馬丁の久吉とは遂に歸らなかつた。

安靜の數日が過ぎた。近藤は手傷療養のため、大坂城へ移されることゝなつた。それが會津侯の

命だと傳へられると、近藤は「さうか」と唯一言いつたきり、大きな波に運び去られるやうに、從容として下坂した。意地張りもせず、殊更無念の樣子も見せず、何か心魂に徹する深い感懷に、身を委ねてしまつた風であつた。

前將軍慶喜は近藤負傷と聞いて、侍醫松本良順を見舞に遣はし、自用の寢具を下げ與へた。會津侯からも醫者が差向けられ、懇ろな見舞があつた。近藤は身に餘る恩遇に感泣しながら、重傷の身を空しく床上に横へてゐた。

廟堂の形勢は慶勝、春嶽、容堂の斡旋により、辭官納地の件が緩和せられて、著しく好轉してゐた。が、西郷、大久保の抱懷する徹底討幕の裏面工作は著々進められて、遂に火の手は江戸にあけられるに至つた。卽ち西郷の意を受けて東下した薩藩の益滿休之助、伊牟田尙平等は、關東擾亂を企圖して府内取締の庄内藩を憤激せしめ、この衝突は遂に薩邸燒打事件となつて現れた。

慶應三年最後の日、大目付瀧川播磨守、勘定奉行小野友五郎の二人は幕兵を率ゐて急遽上坂し、燒打事件を具さに報じた。俄然、局面は逆轉した。東西相應じて事端の激發に努める薩藩の暴戾、もはや赦し難しの聲は城内に沸騰し、奸賊掃攘を叫んで、今や慶喜の戒諭も騎虎の勢を制する能はざる有樣となつた。

明れば慶應四年正月朔日、慶喜は豫ての召命に應じて入朝すると號し、警備の部置を定めて兵を要所に配した。二日、愈々討薩の表を揭げて大坂を發した。伏見、鳥羽兩道を進發する幕軍總數一萬五千。

慶喜の叛狀歴然であるとなし、衝突の機を待構へてゐた薩長軍の、勇躍邀擊に出づる者總數六千五百。

かくて伏見、鳥羽、戊辰の戰端は開かれた。戰は三日に始まり、四日、五日と續いて、六日には幕軍總崩れとなり、大坂へ退却した。親藩たる紀州藩先づ恭順の色を見せて、兵を本國に退き、山崎にあつた津の藤堂藩は官軍に通じ、伏見桃山にあつた彦根藩また薩長に應じて、西上の幕軍に備へるため大津へ去り、嘗ては所司代を勤めた稻葉美濃守の淀藩さへ、官軍に降るに至つては、二倍の兵數を持つた幕軍の敗戰も、また止むを得ぬところであつた。

新選組は近藤に代つて、土方が指揮に當つた。劍技に長じた新選組も、砲戰には手の施しようがなく、三日に亘る烈戰によつて、兵數は無慘にも三分の一に減じ、五十人内外となつて、敗軍と共に大坂へ引揚げた。その五十人さへ、傷ついてゐない者は殆どなかつた。

近藤は床に横つたまゝ詳報を聞くと、感懷的に唯一言「仕方がない」と呟いたきりであつた。

一同は泣いた。

形勢を觀望してゐた諸藩は、今や悉く錦旗の下に馳せ參じ、仁和寺宮嘉彰親王を征討大將軍に戴いた官軍は、七日を期して大擧大坂を衝かんとする勢であつた。前將軍慶喜は頽勢如何とも成し難いのを悟り、六日の夜開陽艦に投じて海上を江戸に走つた。

× × × ×

敗殘の新選組は富士山艦に收容されて、天保山を發した。正月十二日、主なき大坂城が官軍の手に委ねられた後であつた。

三人の重傷者が、手當も碌に行屆かぬ航海中、次々に絶命して行つた。最後の一人は山崎蒸だつた。香取流の棒を使つて、名探偵の名を謳はれ、近藤に見込まれた火事の夜以來、洛中の治安と、新選組のために擧げた功績は大きかつた。その山崎は今、大砲の玉を重みにつけられ、隙士達の手によつて水葬に附されようとしてゐた。近藤はまだ不自由な身を、船室の床に横たへてゐたが、甲板へ出て哀れな送葬を見送つた。瞼が熱かつた。

船は冷たい潮風を衝いて、紀州沖を通つてゐた。

船室へ歸ると、誰も彼も默つてゐた。その中には呻いてゐる者があり、微かに嗚咽してゐる者があり、血の匂ひさへ感ぜられた。……既に夜であつた。洋燈が搖れて、小暗い影を動かしてゐた。

近藤の傍には、病勢が昂じて喀血を續け、伏見の役に參加することも出來なかつた天才劍士の沖田總司が、若い身空を病床に横たへてゐた。顏は蒼黑く憔悴して、死人のやうに眼を閉じたまゝであつた。土方も永倉も、近藤の傍で默りこくつてゐた。頭を繃帶した原田は、これも互ひに傷ついてゐる齋藤、島田、大石などと一塊りになつて、一隅で時々ぼそぼそと話聲を洩してゐた。

文久三年の春、志を抱いて共に江戸を出發してから前後六ケ年。志遂に成らずして、こゝに敗殘の姿を止めてゐる試衞館以來の同志は、近藤を加へて僅かに五人となつてゐた。しかもその中の一人は、既に死を約束されてゐる。……

井上源三郎は伏見で死んだ。劍道師範の池田小太郎も討死した。吉村貫一郎は舊の南部藩へ歸順しようとして、武士道の恥だと罵られ、慨然として自刄して果てた。

近藤は農家に生れた身で、新選組の局長と時めいた昨日までを、夢のやうに思ひ返さずにはゐられなかつた。彼は低い聲で呼んだ。

「土方君。」

「……」

「永倉君。」

「……」

「僕は終始、正義と至誠の道を歩んだつもりだつたが、そのことの是非にかゝはらず、大勢を知ることが出來なかつた。識見も學才もない者が、風雲に乘じて立身を圖つた姿がこれだ。僕は君達に詫びなければならない。」

「局長、何をいひ出すんです。」と土方は不滿な態度で近藤を見上げた。「弱音を吐く場合ではありますまい。我れわれは鐵砲に負けただけです。江戸へ歸つて、今度は本當の戰爭をするんだ。」

「いや」と近藤は沈痛に遮つた。「我れわれは二倍の兵力を以て敗けたのだ。これは單に鐵砲に敗けたのではない。錦旗に敗れたのだ。味方である筈の薩が、次々に錦旗の下へ趨る。……たとへ薩長の策謀するところが、是であらうと非であらうと、そんなことには關りなく、大勢は如何ともすることが出來ないのだ。僕には今になつて初めて、先が見えて來たやうな氣がする。伊東は我れわれを王政復古の妨害者だといつたさうだが、今となつてはそれに違ひなかつた。——伊東を殺す必要もなかつたのだ。……」

「何を、ばかなことをいはれるんです。局長は負傷のために氣が弱くなられた。江戸には旗本八萬騎があります。我れわれも旗本です。薩長を遣つつけるのはこれからです。なう永倉。」

「うむ。……」

永倉の返事には力がなかつた。

近藤は哀れむやうに土方を見た。百姓の子が時勢のために過つて直參の地位に上つた。最後までそれを失ひたくないのであらう。

近藤は山南の最期の時の言葉を思出した。眼を閉じると、肩の創がづきんづきんと痛んで來る。こんな時、久坂には憂悶を遣る卽興の、今様の名文があつた。……いや彼には、それよりももつと心強い、明日を期する信念があつた。……おれには明日がない。……

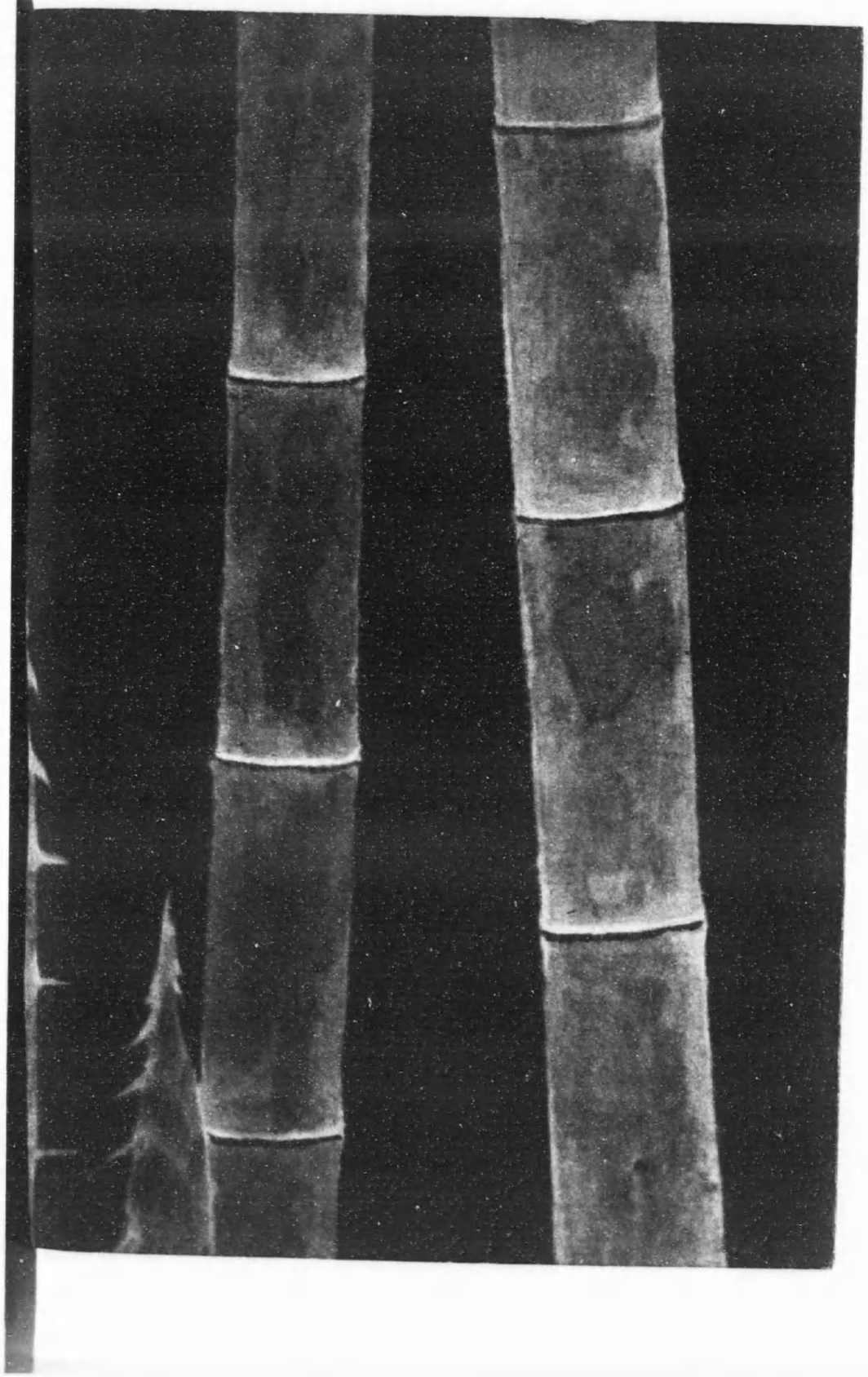
蕭々と寂しさが胸に疼いた。

舷側に波を切る水車の音が、轟々と聞えてゐた。（完）

昭和十七年七月十日初版印刷
昭和十七年七月二十日初版發行
昭和十九年二月十日再版發行
（五、〇〇〇部）

（出版會承認
イ 350573）

定價金壹圓五拾錢
特別行爲稅相當額 金六錢
合計金壹圓五拾六錢

著者 邦枝完二（クニエダ カンジ）
發行者 大阪市南區西櫪町三番地 丸山俊郎
印刷者 大阪市西區南堀江通一丁目一〇 田中恒夫
西大第五六二號
發行所 大阪市南區西櫪町三番地 東光堂
電話南㊱二一四一番
振替大阪六五九六七番
會員番號一二〇〇七一
配給元 東京都神田區淡路町二 日本出版配給株式會社

終